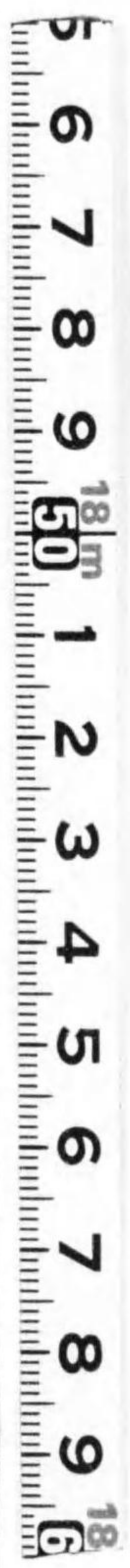


728

特261

893

おまじゅうかじめ集
壺



始



二十一年四月三日 筆先の理をのつたへたる
 二十一年八月四日 大いいたたき重三重のいたと白
 二十一年十月十日 一種三種三種にのつた
 二十一年十月十日 甘露宮一のひかかた
 二十一年四月十日 どちらこちらいおがたとおさめよ
 二十一年四月十日 甘露宮もかんのことやう
 二十一年六月四日 甘の台直火く廣くいらん
 二十一年九月二日 一ひと話ほひのさしん
 二十一年十月一日 軒棟をからべる
 二十一年四月九日 軒の理へへかりたり
 二十一年四月八日 軒棟からべる
 二十一年五月三日 直火かじや表大工
 二十一年八月二日 軒くこの理

五五 二十一年十月十日 出てさしづ
 五七 二十一年七月十日 直火かじや表大工のつめは大工
 五九 二十一年十月十日 甘の台積立てる
 六一 二十一年十月十日 甘の台の中ありき棟梁
 六二 二十一年十月十日 東西かんぼう
 六三 二十一年十月十日 東西南北ちがはんよう
 六四 二十一年十月十日 西七分らん南北さしづ
 六五 二十一年十月十日 表大工直火くやすてかぬり
 六六 二十一年十月十日 甘露宮一人間定めある
 六七 二十一年十月十日 甘の台のつとめ一床
 六八 二十一年十月十日 又直火かじやの始めだし
 六九 二十一年十月十日 大いいたたき重三重のいたと白
 七〇 二十一年十月十日 一本かたたらさくかぬや
 七一 二十一年十月十日
 七二 二十一年十月十日
 七三 二十一年十月十日
 七四 二十一年十月十日

二十一年四月十日 表平口裏口中しまるも者一人
 二十一年十月十日 五木一本か小事情
 二十一年十月十日 笑とソへ火水風
 二十一年十月十日 一つたてかたぢかふとらんほうかよい
 二十一年十月十日 大工一人味つたさしづ
 二十一年十月十日 不思議かひしん内のまにあらん
 二十一年十月十日 白のりからすまのやあひ
 二十一年十月十日 子供さかして親かたのしみ
 二十一年十月十日 高山も谷底も
 二十一年十月十日 誤るるらかあひ
 二十一年十月十日 さあくもうま戸使序の道
 二十一年十月十日 一こは元のじは所あらはれた
 二十一年十月十日 今度のはしん甘の台を一つしんとして
 二十一年十月十日 甘の台をたてたやあらん
 二十一年十月十日 月日とび出たら甘の台を早く出すよう

八八 二十一年十月十日 甘の元いおさきいおさみま申
 八九 二十一年十月十日 さあ甘の台と表理何と思ふ
 九〇 二十一年十月十日 白のり本庄屋敷つとめ場所
 九一 二十一年十月十日 先に甘露宮とあひ
 九二 二十一年十月十日 おは秀司とあひ
 九三 二十一年十月十日 之の子供 面から陳
 九四 二十一年十月十日 子供こからや
 九五 二十一年十月十日 子供の子供のせいじんあすてりた程下
 九六 二十一年十月十日 子供事情見方てやれ
 九七 二十一年十月十日 元の親しらす
 九八 二十一年十月十日 親屋が布り出した
 九九 二十一年十月十日 人はくしてあへ味りて之から日
 一〇〇 二十一年十月十日 元の親

三十五年四月三日	親のあと子供かへば世は代りて来代	三十四年三月三日	奥柱千四五にふつたり	七五
三十五年七月三日	きん播米をひたして身のうちをこむ	三十五年三月十日	正月千六百今始めや	八〇
三十五年八月一日	下程大にせにやあめん	三十五年三月十七日	神が奥柱にたりんか	八三
お筆先十日	六八 七十年はふりーと	お筆先四日	世の中説教として始めかけ	八六
三十五年八月五日	八八 七十年はふりーと	リ三号 二五	高山の説教	八一
三十五年八月十日	八八 七十年はふりーと	リ三号 二五	奥の柱の大小様がい	八二
三十五年八月十五日	八八 七十年はふりーと	リ三号 二五	奥の柱かと人が満足	八三
三十五年八月二十日	八八 七十年はふりーと	お筆先三日	七、この柱早くふよと思へども	八六
お筆先二十五日	八八 七十年はふりーと	リ三号 二五	奥柱亦た水すすまして	八七
三十五年八月三十日	八八 七十年はふりーと	リ三号 二五	今頃はあかしの東し	八八
お筆先九日	八八 七十年はふりーと	リ三号 二五	とどきことばり真か后らん	八九
三十五年八月十日	八八 七十年はふりーと	三十五年八月十日	いと理あきらかか道	九〇
お筆先十四日	八八 七十年はふりーと	三十五年八月十日	さしはあじのあるもの	九一
三十五年八月十五日	八八 七十年はふりーと	三十五年八月十日	いしから芽が出る	九二
お筆先二十日	八八 七十年はふりーと			九三
三十五年八月二十日	八八 七十年はふりーと			九四
お筆先二十五日	八八 七十年はふりーと			九五

明治三十六年十一月二十八日夜十一時五分

刻限おはあし

さしぐと衣は皆先に出る来る人の甘露岩の
 みか先の事い、かける目に見えんか、いたばかり人が遠い所忍
 いつし来い話を聞く様おのめん、
 信者の身と事情にか

理とわかめふまいさしぐと衣みか先の事はかりおいておくあめ
 てもさしぐ通り甘露岩を本部に本がわして道を甘露岩につくする
 めいかりといためいあくと話した理に運はす

明治三十七年八月二十三日
 日露戦争に負かす天理教会に於て出征軍人
 戦死者の子弟学資補助会組織致度續

さあ〜たづねる事よ〜いがかかる事おたづねにやわからんさ
 あ〜今大のつ世界といふ中にいつとさしぐ理は世界にあるとこ
 ぞこれまよせんか事お言葉お示すべた処がわすれるわすれるから

筆先にしらしおいた筆先としふはかる、いやうでおむひかる、心む

つてはいけん話の台であらうとりちがひありてはからん此の台世

界の事情もうどうふううか、わりあうりか、一つの臺敵は大きな

全園においても大それといふふるさ、事には年限からさとしてあ

るこの一つの心得は今日の事もある事、ふた事はあ、わん形あ

処から順序おしてきたる道むつかしい事のもむで、なんざ苦勞

さす道をつけたのやあ、ほのかにさとしているやろ、う理は一つにま

とまりてくれにやあらん比白力より聞き、命けてくれにやあらん道と

中部の道は、むつかし、道はとほりにく、むつかしい道の中

に味があるよりき、わけ

二二 この世のためしがたしかかけである、これにまちが、あんと思へよ

二三 此のためしすみやか見えたことあらば、いか話む比白か誠や不

二四 何もかわいか話む説く程に何をさめてもうと、思んのか

二五 目に見えん神の古の事あることは、何をするとおちよとし水ま、

二六 何れと見えん話である程に、これがたしか、さよこなるをや

二七 何れを見ても何を聞かされたのしめよ、いか話む皆このとふり

明治三十一年三月二十七日
永尾よ志、身止、市頼

一はさしづ、又一、う年限から、つ、さ、し、か、ける、は、ん、じ、の、と、さ、し、づ、く、を、つ

があれせさしづをもつてまゐめてしまふてほろぐ同様にしてはどうか
 からんさしづありてさしづもあるめてしまふ様ふ事ありさしづはいらんも
 本邦信者同は 甘の台は人であるといふ
 のよきさしづだけこうと云ふもちいんありんさしづは其のまゝと云ふは
 信者同は 神の恩恵の人の甘の台
 にはさしづとつて理と云ふかよう聞き分けてんお用ありうが
 手かぬか北んといふがはこぼれやあらん中畧 信者同が教祖百十五才の
 天理の道が 人の甘の台の元へ
 おとろへるといふこれ一う聞き分けてんめん 道の
 年限教へてせかい 人の甘の台の事情
 みれば今一時の理でいせん 人の甘の台の事情
 運ばかりありたるこれから一時さしづ
 一みぶつぎあわせ分らぬはこう云ふかこう云ふさとりついたがこう云ふ
 とありからんこれはどうであつたづぬかやして内々のとあり事情に

さしづありた身上のさわりからどういふとありからか、る比白はこほにや
人の甘の台の元へ
 たらんこれから先に 人の甘の台の事情
 つさとすやらやぶんにさとすやらめからん期限
 さしづ其の目から一日にまつて 人の甘の台からさしづの上からさとした
 こほでこそほんにそうでありたかもあり
 ためて運ばにやあらんよきことを 神のまレグにしろしてある人の甘の台のことは
 だけあつめ外の事は 神のまレグにしろしてある人の甘の台のことは
 そのまゝ、これではか
 つての理とはつちや云ふ理はあいかつての理からめんくすいた様にする
 がよ、

明治三十二年十二月二十七日

梶井安松三才身上申願

天保九年から 本部から出た筆先さしづを
 本邦から出た筆先さしづを 甘の台事情を筆先さしづの上から調べたら信者の精神が
 甘の台事情 甘の台事情
 あからへて道つとたる こほにいらるが
 理とびはいるとびこもとゆふ理 甘の台事情
 した 信者の者は本邦の道から甘の台事情に心から切りかへて通る
 るめんく 心にきりかへてありと
 精神ありんおはたらきかする

身の上

月日思惑の甘き台事情に行かぬとせ

月日不^六の社甘き台

身に「か」らぬばよ、とゆふ様お事ではあらん神一つ事情聞き分けあり

の身上伺ひたむ

の身上うかひい^六たむ

らにむさとしこあらにむさとしさしづぐ〜出てあるさしづぐむちいらすすれ

ばどふむあらんこのさしづぐ聞き分けさしづぐをたふのせいあるとゆうよふ

せんが事ではまだ〜教祖が苦勞と理はわからん

甘き台一段ニ

お事ではどふむあらんむさす〜かんあん理どこにあるかき、わけみお

段ニ段月日の社甘き台事情を誠の甘き台をさふこの度の甘き台を教祖と同じ天啓がおりて自

とりつぎ〜だとしてはじめかけたる理き、わけほんに直筆とゆふとん

分が筆とつてかいてい^六月日が政子にへりては始め行くとおふ月日の思惑心であるから信者の者は甘き台事情に心

かへむとびはいるとゆふとんお事お道の上とゆふ定めつくれ〜あらんむ

身上の事は

天啓者甘き台が出て来たたと

すぐ運んかいつてさしづぐの

のにたのまん〜身の処あんじら事いらんとんお事お聞きたりす〜と

よから聞いたり

一段ニ段ニ段の所をさすから信者一同は

ゆふ精神とびはいるとゆふ早く萬事の処とす聞きのかし見のかしで

甘き台一段ニ段ニ段ニ段の上からさとしたが甘き台がうたがうてい^六から

は道の上とはわけがたふいそこむあちらへすこちらへすさすとすどうむ

月日の社甘き台が出てい^六の上からさとして信者一同は

あらんむさす榎の上に乗せてある間は見えいらる、ふれど尻にむくとゆふ

様おは何を思ふの道か何を聞きんの道か何をたのしんでの道もさあ心に

はまらにやたづぬかやせ

明結ニイ大年五月十三日夜

是道ニ條本林事務所諸の処本部員相談の結果

道の人の甘き台事情とゆふ道を教祖の子供下月日か先んを道の中に甘き台とおさめある人

世界にあり理を始め入人わり、受けけたる理たゞいさ一つの理によ

聞はら心一つのむちよふとゆふ理も悪い理も出る年限がたは人の甘き台を信者一同の心

つてとんお理むかむるだん〜あるまじ〜時おむわく通りや

月日思惑の甘き台

甘き台一段ニ段

甘き台事情一段ニ段ニ段は

ふいはやく〜の道をいさぐからだん〜の事情をこしら〜あみたりて

月日支配の甘き台

の道やふい〜めん〜も聞きおのたやあらんかんむりむせいしんの道

信者一同

月日支配の道で

をあら〜ねばあらんとんおむつかしい道を通るにむ精神の理やだん

七

はつたらすむ信者一同は日日夜夜の甘きおほくの中おほくおおじ心おほくおらま一人の心の理をたてず
は神の恩恵やま天の理おやのおふ事きの成程成程の理もわかる
は神の恩恵やま天の理おやのおふ事きの成程成程の理もわかる

かやしのやきむものやさいさしづの上からさあよう聞き分けるおら成程の理もわかる
信者一同は本部があるに甘き口が出来て道のため
おにもおらんさしづの上からさあよう聞き分けるおら成程の理もわかる

又又おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん
おむつてむいかん又おむつてむいかん又おむつてむいかん

かむわかれば導いた
かたの月日社甘カ島に及討をそ人の運ぶりせよめたりは
かげいひとりわかればめんくの理をばかきあげた理はさかおとしに

おちにやあらんが天の理又一つかわりたはふしこれだけさかしたりと人お者む

ちよと分るやあう分るねばどうもあらん親のじうつかりしやんときいていへは

あらんかわいせう気の事おむの又つしらすおこりた理やあらうまい

甘ろの段三段月日の社と古元をさとしてある月日の社甘ろの段は甘ろの段三段の事情は

せん元々と古おこりと古皆だんの事情は

たのが取らあさへるにおさへられんふんとしよふと思ふ是れより又つどう

するともいはずあるやりああめんやらふあとの事情にまかせお

さあいるやらあめんやらああといふ事情は聞き分けあるやら

あめんやらあめんあめん柱たしつかりさかせあるやらあめんやら

さしづの上から信者同は

かあ是二つの理を聞き分け

明治三十三年十一月二十一日
あんど村の段田の事情に付九州地方へ移井政即派出する事申願

身上同じに

これまやあしよさとして刻限どよふとしてかす知小人程きとしたるおれい

道はこれまやありたら大犬丈と古これおもているからどふもあらん

道の中を思ひてはさしづの意味合き

月日思惑の甘ろの事情と古道のを界に三三と事情がわかリイ来た

よふ聞き分け順序の道とす世界いろく心のわりてくもうこれ

神の理一つたい一事話し又刻限一つかどめくかどめとりくろひていん

道とは云はにやあらんよふ聞き分けたら真の道はつといへばあらんそこ

みかか甘ろの事情はうそか誠か神がたづぬたり

本邦の者は政子甘ろの事情に甘ろの心

ゆめに知らず〜こみみふ〜に忍とやあらん ありらにも反対こち

さしづに

月日思惑心の道

かこれきで制限さしたる 一つかりしてはあらん〜よの聞き分け

神の思惑の甘ろの事情を認める様を神は

一時あさへいる おさへる〜いふゆの理 せらるるふり〜心は早くと思ふはこれ年

たつたら神の思惑の道り出て来る 神の思惑の甘ろの事情は分らふくか年限が来てしまふから神

限年おこる程 ほどきにくいほどす〜い様あつてはあらん かつ聞き分け

本邦の方では甘ろの事情を 甘ろの事情はよくあると

先の方であらやまこや〜しまにおれはよいとあつてはも教祖

甘ろのさしづの中から出ては本邦とつ道下は 本邦のせとに甘ろの口とせらるるを出

の理 これたよりとゆりいければ道やありとはいまい 此れ月日聞き分け

い道とせらるるが神のさしづのかめとあわして行の誠の 甘ろの事情からさしづとゆい言葉は

ゆりもくろみ〜かとあ〜が道である 此の言葉はよふいあらん

甘ろの事情の言葉は ほかの者にも 生後未だ度の働らきの句をばおしたる自分の心か
さしづにみんかきわけいささきとさしづにやあらん うつかりしては 心くやしま

中甘ろのさしづの

にやあらん中にのめ聞き分けめん〜さいよければよいとあつてはあらん

甘ろの事情とあつ本邦の 月日の社甘ろの事情は教祖が親し

道はどのでも通さにやあらん たくにやあらんよの聞き分けある程教祖

さしづ通りの道やから 教子甘ろのさしづ

といはるとくは たくにやあらん 此の理はつづきせん 今のものみあつて

合せてし水にやあらん 先におつて注意とて行かばあらん 甘ろの事情の事は

信者前はどんが火の中やいほの中へとむ様か思ひをして甘ろの事情にはとびこまにやあらん 本

筆につけたる せこせどんが火の中やむとびこみどんがやいほの中やむとゆ

新信者は 月日教祖の真の思惑心の道が とうとうして行かばあらぬ裏衷中を立ちと

ふたるたど道難かりあつて わかりあいいとこでみんか とうとう〜中につ

くさんなものをたどりたか 心にかりるやぶか事なけたのしみではあろうま

さしづがあらんからどういわけかと

さしづをもちいら非比（道が） 早く出る一般二般の事情は一時のせりや来た

い乳にわくる人お事ではいとものが早く（甘う台一般二般の） 一時のせり

三般月日の社甘う台事情を早く踏止めたやありん

々しみとめる（ふみとめる理さと） しくいあれど一般さのしよかり

を思ふは事情始めて京都があとにあらむわかりてきた飯三般や甘う台の事を（さしづの上から）

これたいせばありてあかいでもわかりだん（ささき） さとすさとしから

さとして道の境界の甘う台事情は（月日恩感の甘う台とせ） 神の理は甘う台や

世界おつたもの此の理わすれてしまふよふお事はあらん理は理や

まぬお事に照を促すすけ（始まつた） 政子安子をきせいとして天に

元をすけてむらう助けてもわはどこから通した理か（どこから） こふした理

さしづ（教祖の子供を） 先んふ恩感のいさい甘う台事情は絶体たつかんと

か此の理わかりたら元々たてこにやあらん心すつさりとゆふてし

まのたものはこうどふわあらんどのでわこふでわ道やあけにやしか

んと定めたらわたいものやでつよものやで（京都は） とゆふ事一むけまいともしれ

んよう聞き右けこにみふ（さしづ） さとす

お筆先（一） 明詔三筆道は 今まは神の古ふ事うたかうし何かうせやと古ふてりたあり

四三 このよふを始めた神（月日）の古ふ事にせんた一つもちかう事なし

四四 だん（神の恩感の道甘う台が）と見ふ来たあらとくしんせしわかふむは白現れる

四五 よろづよの世界中を見渡せば道（京都の道甘う台）のしむわしあ（一）にあら

四六 此の先は道（明詔三筆からは）にたとへて話するどこの事とわさるにゆはんや

四七 やまさかやしはらくのうわかけ（神の）つるがのゆも通すぬけたら

四八 まだ見える火の中もあり（明詔三筆からは）ちあかわせれを熱したら細い道あり

奈良山さんからの所收方
細道をせんく越せば天啓者の道これかたしか本道である

神の支配下甘らむること
この話ほかの事やはあり程に神を奉下こればかり

此の先の道のすがらをゆいさかす甘らむ事情いかふ事をばむめやしるまい

何をもつて甘らむ事情見え来るカがこれはおしきや

どの様ふ事をゆふやりしんかふことさしづをもつて何やむことわりばかり

ことわりもちよとの事かあり程にいかふ事をか見え来るやう

どの様ふ事か見えあるやんかふこと道がわかるから信者の者気の毒おもめてしんか

おんどもに見えある事やらこれん月日の心つみきりてある

甘らむ建設するがため
こりほどの月日の心しんほいを本邦員信者見えある者は何も知らず

見えあるはし本邦員信者ことばかりを思て見る見るあらばおんくかわるや

どの様ふ事さしづか先へ知らしおくあとで後悔あき様にせよ

この世を始めた神の事あらばどの様ふ事か皆見えある

此の度はどの様ふ事かせまりきてつみきりてもふさしぬきはさらにむけん

今迄は甘らむ事情いんか事をばむめたとすゆつくりしたるあれども

今日の日は横目引空向世の身上のまも御新しかおんどもいんか事があるやう

今迄は本邦員うちある事をばかりありもうこれからはもんくかわるや

五三 萬世の志界のそこ見渡せど悪きの者はさらにない

五四 いちれつに悪しきとありておしけれどちよとのほりがついた伊忍あり
人の甘ぢが表に出たら

五五 此の先は心しがめて思案せよ後々悔あき様にせよ
月日の社甘ぢが表に出て本音請の出来上りは立教百年祭やあるから信者同は

五六 今道は長い道中道すからよほどたいくつしたであらう
昭和十一年に現れる月日の社甘ぢは

五七 この度はもふたしかあるまいりしよ見おし事あをへとくしんをせよ
明治三年から甘ぢの口が出る迄は 筆先さしつに

五八 此の先は長い道中道すから説りてきかするとくとしやんせ
天理教を治めるため甘ぢを早く表に現わす事を神はせりしている

五九 此の先はうちをおさめる模様だて神のほうには心せよこむ
政子甘ぢの口みすの

一 此からはおふかん道をつけかける世界の心みおろさみ出る
道の

二 月日の社甘ぢ これは旬 出でて来る
かみたるは心しやんで来る程にふんどきくる刻限がきた
本初と古小社茶を甘ぢの飯やんや二飯で

三 ちやつんやあとかりとりしおたあらあと本出るめはよふさづとめや
甘ぢの口の 神が政子に入んが

四 このつとめおちから来ると思ひかかみたるそこわいさみくるや
甘ぢの口とせが

五 だんくと切井のしゆぶとふものは珍らし事をみあしかけるや

六 ちかくとちかみの心のせきこみを皆一列はふんとおわてる

七 ちかにてちも病りたみはさらにあしかみのせきこみでびきあるや
お道の中に 月日の社甘ぢの元へ信者をいさよせの

八 せきこみもあにゆへあるといふあはつとめのにんずほし事から
甘ぢの口の 甘ぢ台建設の

九 此のつとめあんの事やおわているよあづたすけのもよふばかりを
一九

10 甘の山がとめて人を助けぬのは
この助けはまばかりとは思ふよ
これ来代の古記あるそや

11 ちよとはおしのほせのんいきいりる病やはあいかみのせきこみ

12 甘んくも真実神の互を説いて聞かせどもわわかりあ
甘る旨に神なりこんで表へ出よと思へども表に出る同刻限が来おけは

13 はやぐと表へ出よとおわ(とカみちがのりては出るト出ら水ん
甘る旨に來の

14 此の道を見早くつけよとおわ(どもほかあるとこでつけることあし
誠神の道ぞ

15 此の道も真実おわの事おしはむねの中よりよらおしやんせ
さしづを見て
神が言をききおちあける甘る旨を

16 此の話おんの事やと思へりる神の打明場所をせきこむ
月日の社甘る旨事情が

17 此の道がちよと見(かけた事おらほ)世界の心は皆ソきみ出る
道の

18 神のまじつせしかとときわかけ
あににても神の古の事しかときかけやしきのそふじ出けた事あら

19 もう見ある横目しちまわあ程にゆめ見た様にはりあるそや
不思議自由用が
道をたてぬへる

20 このほありすぎやかはれた事あらはあとはよらづの助け一糸
月日思惑は人の甘る旨を建てるといふことがあつたら

明治四十年三月十日(旧正月二十日朝)
手紙と御話有之候の刻限

21 さあくけつはどふいふ話しかけるかわわからんさあ比自わちるかく
神のまじつ通りすまねば信者同に

22 わちいらねば世間どうしてわびするかくこれ知つているか身
本部のまにか

23 限かへて見よくいつまをこんな事とほるか道はみなつがめあるで
神はまじつがつが自を知らぬとあつても

24 つかめ知つているかしら事にあんとほげいいるみんおとり
本部は命運のまじつを

月日が教祖に不仕なまじつに勝ておいた日と本情と本報はつづす殿
教祖と古の道内からつづして、世の道の道不
知しおひししている

たつてあるか、學問やと思ふかさあ、世の道のさかむは、
智者 學者

つありとある、つありとある、神のさかむあるかありやしまし、神の
本報は三日三夜はやす

むが年限が来てついで天啓が出る天啓者が、
このさしづき、わけし百の日
さかむは年限の理づくが、神のさかむである、此一時に聞き分け

甘ろ口の元へこい、
四年から外甘ろ口飯三夜と
今一席

月日の社甘ろ口の元へ、
さしづきと運はし、
はやくこい

だくとおかしかりした
ふくまうして来たといふこい

明治三十三九年九月十四日

月日の社とある、
席と古の知のある者ある、此に答へし見よ

一、よあづよの世男一列見はらせとむぬの分りた者はおいから
月日の思惑はおさしにあり、真の思惑を

二、其のはづや説りてさかした事は、おとち知らぬがむりでおいせや
月日が政子に不仕なまじつに勝ておいた日と本情と本報はつづす殿

三、此の度は神がおもて、あらはれおにかいさいを説いてさかする
信者の人は本報の木の甘ろ口を神のやかた
識の月日の社とある甘ろ口を

四、このとちり大和のじばのかみかたとゆい、水どむむとしろまい
識の甘ろ口を

五、此の元を香しく聞いた事あらば、いかか者とも比おひしある
さしづきの説と甘ろ口の元のたましいんぬん

六、さかたくば尋ね収束するあらゆいさ、わすよあづづいのもとの思ぬん
月日が政子甘ろ口に不仕なまじつに勝ておいた日と本情と本報はつづす殿

七、神が出入おにかいさいを説くあらば、世男一列心りさむる
識の世男

八、いあつに早く助けをささぐから、世男のこ、ろ、みか、りい
識の世男

九 信者の
いづれん
に甘らら事情がもちいられて
おんかんくんと勇かんを来るおらば
おんよの中とこはんじよふ

一 ぢふさきへきびしくつかへたるおらつきびのこころせきこみである
月日の社甘ら台が現れたおら

二 この先は一列あるにだんくんとみのうちさわりみあつてである

三 どの様おさわりついてもあんどよ月日の心おらのおもわく
あんじあよ

四 身のうちにさわりついてもめへのこころをれ
あんあくせ
比喩わけるであ

五 眞実におもふこころとめへのしやんばかりをおもいおるとを
の月日思慮の甘ら台を
ものもある

六 つきむにはどの様おこころいおわものこのたびしかとわけてみせるで
をわつて
月日の社甘ら台が来て来たから

七 信者前
神が
どの様お心おしかと見ているで月日このたび比喩わけるであ
が政子甘ら台に下りこんだ

八 うち先のついでよばかりはいらぬものこころのまことつきむ見ている
本御甘ら台二段二段で
月日の社甘ら台とて

九 こころをわくろく話してはれどほん眞実が見えておいの
昭和イ年からは政子甘ら台がさしづの上から

一〇 今日の日は何の話をしたるとわちがう様あることはゆわねど
さしづとして

二 月日より一度おつて四週たあういつにありてもおらう事ありし
本御員
月日の社甘ら台を道の

三 せれ知りまうせばの心はたれたいわを思ひあみある様を思ひて
月日の社甘ら台が一本御のそとでさしづの上から
一本置くとれとてゆくから其の時

四 此の度のおやむとやうでとくしんせ皆の心もめへめこころわ
信者同
自分の

五 此の事をかうよじさいはちがはねど
信者前
信者の心にし系知おけねは

六 信者
月日の社政子甘ら台が道の親であるとおふことが
いぢれつに系知せしたる事おらばつかひうけよてたしかたすける

一六

月日が諸君を思ふ誠が助けを以てゆく旨の社甘ろの旨を 政子甘ろの旨が道にまかすにすぎず 昭和十年

一七

此のたまげどうおの事へおもひかか 三月月日はそとへかゝるよふ

一八

話でもおあじとわろむとわらうばおんと人間心あるよふ

一九

比白の者 思ふ心は気の毒や此の度所わろて話を

二〇

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二一

たいあい忍月日ソリこみ自由用を云ソイ〜れども業知あるまい

二二

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二三

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二四

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二五

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二六

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二七

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二八

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

二九

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

三〇

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

三一

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

三二

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

三三

此の先はせへいつばいだん〜とことわりたゆ急かゝる事あり

甘ろのロニ下リ

一

本都の 道をととに 月日の社甘ろの旨とてい

二

廣く 明よりさしかけ 本家の およふしよふかい

三

理の本番請 月日の社甘ろの旨

四

垂百請するあらがどりから見定めつけにやんかんで

五

神の布用せつとめいる場所本都が

六

見ればよふばがじやまにあるといへおほしよからうを

七

神の布用せつとめいる場所

八

よふばひとつでいかにみいつゆうつはせにやあらん

九

いつまを 思ふおほしよつづれよふばがじやまにあ

一〇

お筆先おほしよの上から見定めて理を申づるがよい

一一

本都甘ろの旨がた殿三殿の理を

一二

なんかわたちものよりはいあて 三殿月日の社甘ろの旨を

一三

信者同は月日の社甘ろの旨が

一四

月日の社とてい甘ろの旨

一五

屋敷 あいとは思ひあよ もとの屋敷があるほどに

一六

屋敷 あいとは思ひあよ もとの屋敷があるほどに

九ツ 甘らばは本郷に入らばに今のまゝで
このうちたいつつオラでもおりにわらふとおわへども

イド 此の度びせむかおいかた世員りそたちかへる
イド 四号 今まさと道がわりてある程に早くせよこみ大かんの道

七〇 此の道はいつの事やとおもてける早く出て見よもう今のこと
理の本音請(甘らばに人教あつめる)の事は 信者の

七二 甘らばに人教あつめる本音請をせんおら事か 身上の者かもしづ通心定めたら
こいさのが早くさとりがつりたあら 身のうちおやみすきわかになる

七三 天理の 教祖が を教へて甘らば建教のため
つとめでもはじめてもどりまたかぐら ちよとのほそ道つけてあんどむ

七四 天理の 教祖が を教へて甘らば建教のため
つとめでもはじめてもどりまたかぐら ちよとのほそ道つけてあんどむ

七五 天理の 教祖が を教へて甘らば建教のため
つとめでもはじめてもどりまたかぐら ちよとのほそ道つけてあんどむ

七六 信者の 人の甘らば五本の
にちくに心りんをせきこめよ 早く本道つけた事あら

七七 眞実に 此の本道が つりたあらすゑはたのもし陽気づくめや
天理の信者はおほ早くたまげやりたりから月日思慮をさしづの上から

七八 むらかたはあはむたよけをせへける 早く思案をしてしれるよう

七九 道の 月日の代理甘らばの 信者 月日の社甘らばを
世界中の神のためには比白吾が子一列は皆親と思へよ

八〇 道の へ聞かすため甘らば事情を さしづを 信者一列は
世界中の 説教として 始めかけ 説りてまかする 聞きにゆくあり

八一 信者の目に甘らば事情を見いりてもどうもわけが人の甘らばが出て来たか
いかほむに見えたる事をよめたとして 元を 知りねば分るめはあし

八二 人の甘らばの
だんくどあし事はかりぬい置てもい出たあらはこんか才奥や

八三 一同は天理の 信者の者 甘らば本道に
一列に神にもたれよこの子供 早く表へ出るもようせよ

八四 一同は天理の 信者の者 甘らば本道に
一列に神にもたれよこの子供 早く表へ出るもようせよ

八五 一同は天理の 信者の者 甘らば本道に
一列に神にもたれよこの子供 早く表へ出るもようせよ

ハ四 眞實に善へ出よと 思ふから 心しめて 眞をたづねよ
天理の眞實の者は眞實の心で月日思慮の道に

ハ五 この子供 眞實より もむぬの中 見定めつけばいかに模様も
信者の心で神の思慮が

ハ六 心づくに神の心はせまこめど 子供の心わかりあいの下
信者の心で神の思慮が

ハ七 子供でむちよとの人をあいかうに おほくのむねがさうにわからん
明治三十三年二月六日 午前五時
本席様御身上俄に腹つっぱり中障りニ甘願

さあ〜〜〜 あがらへての事だ 一つやらのはおしどろいふはおしもう
長い年限の間の

こい〜〜〜 月日の社甘らひが道の世界へ 甘らひの心かた敵ニ殿
百年祭は甘らひ一つにあつめると
話し一日と七か日があ
る

こい〜〜〜 月日の社甘らひが出て来る道に甘らひの敵ニ殿
信者の心で
聞りてゐるやうに かりかたあ

道のたてかへは

この事やおもふてゐるおんどきとわからんよふ聞りておかぬは
信者同は

あらん事情しりも 身上はやいめにしらしめてある
本席信者は

ふん通れる おうかん道はとほりにくひ大かん道は世間である 細道
道の

かとほりよいて大かんとほりにくひなんやとおむふはそ道一人の道
本席はよくはよく置て行く

又かん 世界の道 にかある道 はじまる
事情が

日限の理かす〜 見える 世界の処見おかけたらいとが
甘らひ事情

本都の道は一時的のものにあつて 取りはらはれよとむ
む教百年祭と古く年は
し〜 とう〜 時かんときとむ はかりがたない 一日の日〜 心をかしふ
月日の社甘らひ一つに道をまよとめるは
〜 中々むつかしいのやでとんふ事があつておさめかけたらいと

に沿まる道がむつかしい皆お揃ふて真実の道さへあればどんが事

中が
おあめめる

八 屋敷の土を掘り取りて所か忍るばかりや下

明治三十二年二月二日夜
前と同様の上願出と申指回す本都員不残打揃願出申指回

是道本部のの処道にして順序の理は皆お知つて一時的の処はどうも通りにくか

つたやろ四方正南鏡屋敷と云りて始めた鏡屋敷どう云ふか

うつりたか鏡屋敷くどこから眺めてお景りあいのが鏡屋敷どう

わあらん皆お人間心もわつて通りたどお水ばかりであっただんくす

本部の道と 本部の道と月日思慮画にミシブの上から見分けし月日の社名を以て云ふ

つぎり、そうじせにやあらん、どろ水出てあどすんだ道

とす甘ちが一般三飯が出て本部の道は神の思慮の方なら高はかり、神の思慮のなる本部の道

どうありか、どうありどろはどろや、かたまりた、どろの中、か、あにほど

のこといふてお聞こ忍やせん、どろはおそわしいどろはどろだけでしづんが

まむたり、ぢの兄こといふだんく、つぐへのさとししてわどろか、つよかつた

どろのさかりはあんのたのしみわあ、いよるく、何時間の暇をついやした

だんじあつても、甘ちがニミシと、表に現れ出た

世間をあきらか一寸見忍かけたこ水から人血然そあうて、一つの心から

月日の社甘うの建設の働らきは

にちくつくす理は年々に見急ぐる本代生産の理にあるとし

らしおく之小まを咄しした事はあい今日は大勢からあつきたる

本報が教祖加道を教祖の恩恵は月日の社甘うと人数あつめをするときからまあかうしてはじめかけた人象として始めた

これにやあらんこ小まを人か出世すればねたむものはそれらあいあれど

信者の月日の社甘うは教祖の子供が宿願から出て来るから其の心に理をおもはねばねたむ同じ事人の出世たのしんでくれにやあら

んほんにあれであえ道の理かとたのしんでくれいそそ道である

人の出世うらみ先収みは道であいそれを見てもその理をたのしむあ

ら日々ちかづく理であるほどにこれら聞き分けてしつかり心

けつこうお道が

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

にちくつくす理は年々に見急ぐる本代生産の理にあるとし

らしおく之小まを咄しした事はあい今日は大勢からあつきたる

本報が教祖加道を教祖の恩恵は月日の社甘うと人数あつめをするときからまあかうしてはじめかけた人象として始めた

これにやあらんこ小まを人か出世すればねたむものはそれらあいあれど

信者の月日の社甘うは教祖の子供が宿願から出て来るから其の心に理をおもはねばねたむ同じ事人の出世たのしんでくれにやあら

んほんにあれであえ道の理かとたのしんでくれいそそ道である

人の出世うらみ先収みは道であいそれを見てもその理をたのしむあ

ら日々ちかづく理であるほどにこれら聞き分けてしつかり心

けつこうお道が

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

月日の社甘うの心にあて

信者同の

わんかたあひ月日の社甘みゆと云ふ
を始りて云ふ

分けてくれにやあらんさあ
明治三十九年五月八日

敷島方教合長山田伊八郎孫身上并き
や本席様前お歸の際申上ぐ其時のおさしづ

身上はすつさりことわりてくれさあ
この事を
お教旨等は本部教合は身上だすけ

お断りてくれ皆の者へしつかりつたへてくれ
断りてくれの処身上はすつ

さりいかんさあ
道をあげてこい
道をあげてくれはどん

お守り護おする道をあげてこにや守り護は出来ん

明治三十七年十一月二日
本席様申身上

月日の社と云ふ
さしづとして
心に理を建てる

本部の道

ありいかへてくれにやあらん時と云ふ句と云ふ時はづれはあらん

んあらどうしたらよかつとめん
精神心にあろうさあ
よ

う聞き分けくれにやあらんどうでもころであら
神の思慮に甘る事情

ついたら細い道に一寸しらしたる真の中にあつて理を頂きて

いる者あはどくるしんでいるものおほいまたほのかに聞き分け

んか事と云ふ者あろう台と云ふあり
政子が神の台である

年限とゆふ日があろうめん
神の思慮を建てるにわらうと

いしんの理心に一寸にむすんでおかにやあらん一寸はあしりけたるこ

れをよう思案して見よ 国のためとゆふて存存はたす者もあろう

三千世同存を助けよける道ありは

また此の道と云ふはあほむ心一つにたおさめてくれにやあらんようき

月日の社甘らるる

きて比自一つにたむつてくれにやあらん

斬目らくして

神の思案の人の甘らるる

さあ〜一言いひておかにやあらん 何水あるやろう〜どうで

かるやろうとゆふてあるにきまりたとゆふ心比自お〜の中にあるや

神の道は

ろうよう思案して見よ 時とゆふ句とゆふ時ありや句ある句かは

月日の社甘らるる

信者の者は

づれたら〜かけから〜みかへせにやあらんさあ〜どうでもこう

自分の地位を

月日の社甘らるる

でもおぼすてありとわ一人の心にしつかりとあせてくれにやあらん

信者が 月日の社甘らるる

あんほうよくつても一人の心による心あれば守り護とゆふそナでい

月日の社甘らるるに信者自の心せつた

つまねむ同じ事である一つ心をきめてくれにやあらん

明治二十四年二月二十日 一月二十日 願

即本席様亦身上而障りに付願

今年一月 ぶるき あたらしいといふ 年がかわる春におる

信者自は甘らるるの元へ 道理を取て始めていふ高き所の人々は 道の中〜

だん〜 出ようじやあいか世に遠く高き処〜といふ十分はびこ

月日思感の甘らるるの

つて神の道をつぶして見よのかたいの思案を取次事情又此

に運んあん甘らるるの段 三段と道の中に出いては信者の

〜の思感だん〜 國々〜 それ〜 一時に見せる〜

同は昭和十年正月に甘らるるの段と

だん〜 雨その水じ かんやいああとつふ あれ何んかあるあちらから

か〜おいてまた甘らるるの段なり甘らるるといふ

又甘る台に段や甘る台に代大とちか
甘る台地場のみとめより方十一年目に月日の社が
印を持って出る処まあくの印をもつて出る
一年おかけきりおし
甘る台とちか二段から所をかへて表に現れしりい所かり始めたこの夜の月日の社は
おかげとちかの事情父が受けたあつと
ほのか
年々おかげ

事情ある道の者は
甘る台事情を
甘る台事情は月日男感心
まあく
かんむりでもつふそうとり拂ふとおも
どお神一条の
道の印に見えんものをばらばら
甘る台事情を
甘る台が道の世界に
よいかおむの
あつとへちやんとの理が

すわつてある是道あんどる者がおぼてあらん
お中にはどうか
今一時の心を定めりん
甘る台事情に
から
教念のほせい
の道をは

こんだがよく
おむりてみよ
僅かの間
見小からせかい
ビツシヤ
月日の社甘る台
が出来た百年祭とちか年限迄には
リつぶしてから
今の事情三年千日とむさとしてあるもう
僅かの日

神の思ひ通り道を行き渡ら

何れもかでもおよほきにやあらん
又オ中
三てん
四てん
とほ
かある信者同が甘る台事情を
さしづの上から
神か来た自利限か来た甘る台
る道
ひかり
明けは
ふか
くさ
とさ
う
刻限
事情を
おつては
お

しかける念らん事はたづねるやう
皆それ
く
せん
めい
中の
心か

甘る台事情に道は神が守護して結構か
道は見小だけの道を見せよう
さあ
く
し
つ
か
り
筆
に
か
き
と
つ
て

信者
向
に
も
つ
た
名
い
く
れ
る
や
う

明治二十四年三月七日(旧正月廿八日)夜二時
刻限

大正十一年から十五年百年祭にかつたら
さあ
く
五
年
く
五
年
た
つ
た
ら
ど
う
か
道
と
も
念
ろ
ま
い
世
界
す
き
り
た
て
か
わ
る
甘
る
台
一
段
二
段
か
出
た
二
段
か
五
年
三
段
か
五
年
の
道
も
わ
か
ら
ま
い
一
年
た
て
ば
一
つ
の
事
情
又
一
年
た
て
ば
一
つ
の

明治八年甘ろ台地場のみ止めより
事情 年にとりて 六十一年 何かけ〜とまちか 収たる処又
本郡より甘ろ台事情に理が移った徳川時より
つには 改正〜とつふ 明治の代と古ふ 國會

甘ろ台一殿と通つても自由田が出たから
といふ 志らぬ〜 まつてさあ ちのしみの道はさらにありま〜

ろロ三年の 甘ろ台一殿は教祖理の抑止同より 三十年昭和十年迄の事情やある 政子甘ろ台
夜のまの事情を思安おせよ 國會ニ十三年と古ふた 又一つの

か出来る月日の社と古ふ
事情 何かけ〜の事情よふ思安おせよさあ〜 あければ五年

何事おさしげ通りの政子甘ろ台 信者の心に
といふ 萬事一つの事情を定めかけ 定めるには人間の心はさら

〜いらんよわい心は更に持たずさか収えんりよは必ずいらんさ

あ思安おレイ々川 昭和十年からは月日の社甘ろ台 一糸
こ水から先は神一糸り道 國會では 昭まら

月日の社政子甘ろ台 大きか道かりりさい政子甘ろ台の道を行はこはい様に思ふがそれか
ん神一糸の道やおさめる こはい道か あつて やれたのしみ

と古ふ五年〜の事情もうちちすつたる一つの日柄世上にはよ

ほどの理もはこびやう〜の理がすおさめかけおさめかけは何かむ

あつて どの道も中々むつかしい道である甘ろ台一殿の
つかし道である どういふ事もむつかしい 年があけたら 五年一日の日

概 はじめの 國々〜の処 萬事〜ともしまり々あ〜

何かだんじ〜だんじのけつはこれまをより神のさしづさしづ

通りの道あらんお事お忍んりよさか収するやあいさあたのしん

だ五ヶ年長のしんだ 一日の日ばんじだんじ又思惑一つの事情は

自判限が来たら信者一同がさしづの上から
又々たづねつくれるやふ

お筆先十三日

七三 此の先はりうけのこゑをちがねんよどうぞしいかりしよわしてくれ
昭和十一年 信者一同が集まつておける月日の社甘ろは事情の向がけを信者一同は
昭和十一年 思齋月日の社甘ろは建設道のたてかゝる事わざしづの上から

七二 今日からは月日の思の書をばおどの様お事お皆申ひかける

七四 いままでもたりて話お説いたれども月日おわくまだ申ひてない
昭和十一年 月日の社甘ろはがさしづの上から 信者一同は

七五 ちれかうはどんおはあしをしたるとわ之れも必ずうそも思ふお
月日の社甘ろはがさしづの上から

七六 どの様お事をあやらしらんが月日の心せりていゝるから
月日がせりていゝるとおいことは 神の思齋の分る甘ろ台一か神の思齋の分らん本都も国々の信者
このち、ちどぶち事におわぶかあ日本もからわんじくまそ也
月日の社甘ろはがさしづの上から

七七 このあしは道のりよほどあるけれど一夜の間にははたらきをする
昭和十一年から十年の 月日の社甘ろはがさしづの上から
甘ろは道にまよる

七八

七九 此の語人間何とおわいひのつぎひかしわの皆吾の子供
信者一同は 人間のわがらは 不あから神の目録がある

八〇 一つまやわつさむじのくりしてしれぬつにありてもおるまるめあし
道のりの中の水に 仰教科の子供の改子に入らむが信者一同は

八一 是れ故に月日おかけるはたにさにてお入出るやらしりた者あし
道のり

八二 せかじがうこゝろあすますと申ひからにはあよとの事やとくらにおむうか
道のり 道のお慮の甘露の結しを解いて 神の思齋の思にまよる

八三 どの様お事おわめへくおぬのうちすましたおらはあぶあさけあ
月日の社甘ろはがさしづの上から

八四 だんくとも月日にちくおわわくは おふく人をもまつはかりや不
月日の社甘ろはがさしづの上から 信者一同は 神の子供やあから申ひ

八五 此の人をどいつ事お待つからはへ列五の子助けたいから
百聖堂に道のり 月日の社甘ろは建設道のたてかゝる事

八六 今年にはどんお珍らし道行助が 見きて来るからこれしれんやな
四社

八七 久あきさきふんは 眞実なること 誰れか 固く 命けする者ばかり

八八 此水故に 月日このたびどの様か 身も眞実みあして 見えざる 現世して

八九 どの様か 夢をしたる人 固く 心すじりさりに 思ふふか

九〇 つまむには ぬまり 眞實見かぬるを 所をかへて 甘る信者 情を隠りて ぬく

九一 いかほいのごうて 昭和十一年から 月日は 世に 昭和 たるわわのきやわ 此れをたよりしきりに おわうか

九二 此の度は 神が表に 現れて 自由 自在に 語る 或る かり さしづの上から

九三 どの様か 事も 眞実なるからは 神様が 自由 自在に 働かざるを して 眞実を見せし 下から 信者の 者は むねのうちよ せむしり 或みさる

九四 才まては 一列は 皆人 固く 心はかりし 思案した 此れと 本教 教壇

九五 此の度は 昭和十一年から 月日は 世に 昭和 どの様か 事も 人固く 心も 固く 是らに 固く 固く 道のようたい

九六 何れか どの様か 事も 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 本教

九七 高山か どの様か 事も 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 本教

九八 月日には どの様か 事も 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 本教

九九 むねのうち 月日に 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 本教

一〇〇 月日よ 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 本教

一〇一 せきこみ 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 本教

一〇二 此の 話 信者 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 固く 本教

一三 月日には第一之水の助けたること、其の様な事も云ふのや

一四 何れか月日、かほどくといへむ、誠は海にゆく水も者かし

一五 是れ故に月日の誠、金五腹が、やまく、積り、かさおりにある

一六 今迄は月日、来るん、是れ水故に、おとし、りた、こと、あつた、む

一七 昭和三十年、神の恩恵の旬が、来る、む、
此の度は、わう、白、わ、ん、か、ある、から、お、ん、か、は、事、も、早、く、か、る、む

一八 此の先は、どの様か、道がある、と、わ、ん、を、う、ら、み、お、ま、り、が、身、う、ら、み、也、
昭和三十年、甘の台、月日、が、不、定、信、者、の、誠、真、実、誠、と、し、て、行、く、が、お、ま、り、神、の、恩、恵、を、ま、か、つ、た、ら、
此の先は、どの様か、道がある、と、わ、ん、を、う、ら、み、お、ま、り、が、身、う、ら、み、也、
後、悔、せ、ぬ、は、お、ん、

一九 此の話し、木の事、も、北、云、は、ん、で、か、
月日、が、甘、の、台、に、入、り、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

二〇 この様か、事、を、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

二一 昭和三十年、甘の台、
此の先は、何、を、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

二二 真実の助けは、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

二三 真実の者は、神の恩恵を、
信、者、一、同、也、

二四 真実に、心、澄、した、真、の、上、は、
信、者、一、同、也、

二五 此の助け、どう、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

二六 まだ、物、け、が、ま、ま、し、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

二七 何れか、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

二八 何れか、お、ん、か、さ、し、ぐ、の、上、か、う、
信、者、一、同、也、

昭和十年から
此の度はどの様な事か
真実を司るの来りから
皆七いのかす

一言
月日にはあにかあめんと
ゆわんでおひめめへ
の心次第や

明治二十年一月十三日
（同十二月十日）
中山様へ
毎夜御勤の稽古致しまして
礎のり平々揃ひまで
願致します

さあ
いぢどの話も
聞ソてきつと
お止めおか
収はあらん
又々の道

が
ある
道の
おある
新の
聞き
分け
た
の
め
は
い
か
ん
順

序の道
（を南つてく水）

明治二十八年十二月十六日
京都大叢地所からし願

さあ
いぢ
どの話も
聞ソて
きつと
お止め
おか
収は
あらん
又々の
道

始め
いぢ
どの話も
聞ソて
きつと
お止め
おか
収は
あらん
又々の
道

いぢ
どの話も
聞ソて
きつと
お止め
おか
収は
あらん
又々の
道

いぢ
どの話も
聞ソて
きつと
お止め
おか
収は
あらん
又々の
道

いぢ
どの話も
聞ソて
きつと
お止め
おか
収は
あらん
又々の
道

いぢ
どの話も
聞ソて
きつと
お止め
おか
収は
あらん
又々の
道

いぢ
どの話も
聞ソて
きつと
お止め
おか
収は
あらん
又々の
道

くするやろ

明治二十七年十一月十三日
午後五時
期限のおはあし

月日恩愛の甘ろ台事情の

月日の社甘ろ台と云ふ道や道もたへ入る

五四

四五 此の道も子供一列思ふ所せよ どの様お道があるや知らん

月日の社甘ろ台と云ふ事は甘ろ台二殿二殿と云ふ所のよから

四六 どの様お事でもささいしらしらくおくあどでこうかいあき様はせよ

信者同は

道の

四七 こんお事あにせ云うやと比喩の者おもつてあるふ子供かわり

葉

より神の恩愛の致子甘ろ台が天理の親と

四八 世田中おぼくの子供むねのうち なるもよつがこはあいかよ

天理と云ふ

四九 此様お事せくとく 云ふのち 道を守おじているもようから

昭和十一年から道のよふだいせきじつの上から

五〇 こいからはどの様お事も云へ聞かすこれ必おうそと思ふお

恩愛の甘ろ台と云ふ神の 信者同は

五一 この度の月日の仕事しかと云へ 悪しきの様お事にせんせや

月日の社甘ろ台である

五二 どうおして珍らし助け教へたさくそこでかゝりた仕事おるや

本郷にはこんかしたを月日の社甘ろ台に

五三 今まよとこ、あしかりし水かへてよふきづくめのこ、ああるよふ

か致子甘ろ台の 不恩誼お助けをせやく

五四 このこ、ちどうしてあるとおもふかお月日たいあいりこんだあら

五五 にちく〜にひとり心がしよ、むありよふきづくめのこ、ああるよふ

信者同の

五六 月日よりちく〜にしよめかけ陽気つくめにしてかゝるやあ

五七 此の話おんと思ふて聞てゐる助け一条の模様様ばかりを

明治二十七年四月三日 午後二時

刻限のおはあし

あ〜一寸話しておくとあ話しておくと話しておかにはやあらん

一寸筆に書きとめてくれ 信者同の 話はいふまややかういふ道にあ

五五

りて来るとはわかろうまい、いつからありたるわからうまい、^{甘ら口の事情が出来たか} 話したにまつたへ

てある筆先にもつたへある話し一字、^{甘ら口の話しさしづの上から} 事情しらべたらわかる

筆の理にいらせたら、^{中甘ら口は政子である} 外も比自わかるおんべんさとして、^{甘ら口事情一段二段不さしづの上から} もくろく

とまいてしまふておく、^{甘ら口} どうもおらん一年の処思をホしたらわかる

百年祭迄の、^{百年祭から先の} 今年の事分る、^{さしづの上から百年祭迄の事} 事は分らうまい、^{さしづの上から} さかす神の

道をもつたて、^{甘ら口事情} あつちの顔をおがめ、^{本都員} 教会の先生

の義理をたてる、^{甘ら口事情} 神の道とは云へ様まい、^{甘ら口事情} おもふ、^{比自が思っている甘ら口建設が出来} 出る

らんの事情は、^{甘ら口事情} かぶいふ事である、^{甘ら口事情} わかる、^{甘ら口事情} 人から

本都員、^{本都員} 教会の先生方、^{本都員} 甘ら口とは

から、^{本都員} あちりこちらの顔を眺め、^{本都員} この水は一つの道とは云へやう

まい、^{本都員} いかお理をはこび、^{本都員} 皆心の理をよせ、^{本都員} 人間の心、^{本都員} 人間の道はい

らん、^{本都員} 明治二十二年八月四日、^{本都員} 旧七月八日、^{本都員} 夜半時

天の理、^{本都員} おしへや、^{本都員} やれ、^{本都員} むろたのしみ、^{本都員} かつた、^{本都員} どんぶ理も、^{本都員} 分る、^{本都員} 出る

志つしん、^{本都員} 大きい、^{本都員} した、^{本都員} も二重、^{本都員} 三重の、^{本都員} した、^{本都員} をとる、^{本都員} 中には、^{本都員} どんぶ、^{本都員} 出す、^{本都員} 出る

さしづの上から、^{本都員} 聞き分け、^{本都員} この事情、^{本都員} しつかり、^{本都員} 聞き分け、^{本都員} らる、^{本都員} ちかき、^{本都員} やれ

百年樂とある自期限が来て道が甘ろ台一つにおさまる甘ろ台事事情もある

はじまつたあ年限の理によつて世界一つの事情之れをしつ

かり聞き分け親の残念一つの道を通る理と去ふまわる理

めんく見れく事情一つの話しかけるといふごん事情も

のべにやニ重ニ重のふたをとらぬばあらんよふ聞き分け神友は

八方よるから夜よぎあきもう一つの事情といふ人間の理といふはあす

の理があいよう聞き分けく水ぬはわからんごん事情も理によつ

てわかるあんがく親の通つた理がわかれば皆分る一方ひるがる

八日 九日 くがあくあつて一つの親一つの理が是あわつて

百年の樂の年には道の
 一日の日は世界一方といふよふかにかの処よう聞き分け親の
 道とほりくさりだぬだんくにまく親の道わかると去ふ何かの
 必聞き分けくられるやう
 明治二十五年一月十二日 正午
 御本席身とお障二付伺
 一つの席(甘ろ台)を出すと甘ろ台二三と道の
 一席三名だしい
 甘ろ台一つは
 つきりつあしでしようつあざかいたら一重にも二重にもつなぐつなげは出るに
 事情を かつてに甘ろ台にあつてとあつてもあつて事は出来ん本席が甘ろ台一般を
 もやぶら水んはいるにもはいら水ん 一重やぶつてむ
 又一重やぶつて
 ん様につあいでゆく日々さすけくつあがくやあいな世田女中の心の理をつ

甘露台一殿二殿と道の中に
ほくのやさあ二重にも 三重にもつかい
お筆先士号 月日の社甘露台が表に出る迄の

三三 今日までの月日の心 殊念はよいある事であいて思へよ

三二 人間はあぶかい者であるからに月日する事 知りた者おし

三四 月日には何か島をたんくと 断りある之小か 兼知か
信者同は

三五 今までも何か月日の 殊念をたいてくどきつめてあはれども
道の

三六 在りたは誰れかしりた者はおし月日の心 殊念を見よ
月日の社甘露台が表に出る迄の

三七 此の度には 断りた上又くどき 其の上ある のことわりである
甘露台一殿二殿と
月日の社甘露台が表に出る迄の

三八 いかほどにくどき 断りた上として たいか 聞き分けする者はおし
本邦同は

甘露台一殿二殿と

二九 それ故にたんく 日柄たつけれど かつか之れやとわかるめはおし
甘露台一殿二殿を月日の社甘露台と

三〇 今日の日はもうせぬつうが来るから 月日出かけは白兼知せよ
昭和二年は 月日の社甘露台が表に出る
甘露台一殿二殿と
本邦同は

明治二十二年十月十一日
教會本部開延式同日の二甘露台いおかたの願

天啓者政子

さあ 甘露台一殿二殿と 今までもに世界のところにはおぼ

れであるさあ いま一々に こといひおかた かんた 甘露台一殿二殿は
政子甘露台が表に出る事には甘露台一殿二殿と
人の甘露台いおかたも かんたのよから 甘露台いおかた一殿二殿は

かたはいおかた さあ かんた 理をさとして たら大せうに
甘露台いおかた一殿二殿は

ある さあ かんたはいおかたの事だけさあ 大せうか
甘露台いおかた一殿二殿は

自由用は出あから 信者一同は 聞きて来たけ
事や理をさとして たらとふん かんた 大せうか事すれば
甘露台いおかた一殿二殿は

昭和三年昭和十年と云ふ事が出来た
心うのとうしいやうなものやさあ
甘露台一段二段三段
一日、二日、三日さあ

あつさりよ

明治四十年四月十日 午前八時三十分 百頁さしづか一頁

本人政由をも市差図の理を定め西の部連を
世員に受ける事決心致しまして御座り候と申上

余分者を本部に世員に受けると云ふ様や
さあ
世員に受けると云ふ言葉は甘露台に

竹の舟 牧方 裏表 甘露台の 本部に
つ詰めどちらこちら 一つ理 雛形と 詰めてくれ

甘露台裏表と本部におさまつたり
さあ
席も之より安神もう何にも云ふ

事いらん云方
お筆先三号

と神の心と云ふものは不思議現はし助けせよこむ

一五 此の不思議ふんの事やと思ひ、^{心の}ふほり^{日月思感を見分けさす}拵ふて^{拵除したる}

一六 後亦るに早く柱を入れたら
天理の道の

一七 此の話はやく見えた事ならばいか者でも比喩とくしんを

一八 今まではしよこだめしと言ふあるが
甘露台は百年祭より 道の中心へ
天啓が出ている

一九 この者を四年以上卧れむかひとり
甘露台を天の屋敷本部へ
神がだきしめ之水がしよこや

二〇 直実早くかやする模様だ
甘露台は
甘露台二段三段には
神のせきこみ之水が筋一

二一 之水までは自由用自在とまよけど
何れ見えた事はおけ水と

二二 之水からはいか話も説きおいて
三段甘露台は
それ見えたから自由用自在や

道の中の 尚教祖百十九才より辛未年自百年集より甘露台一集三世の世を
今までの事は何も言ふ水あ 二十六日に 始めかけけるべ

二四 之小からは世田の心いさみかけ 日本おさめる模様するそや
明治四十年六月四日 百日さしづ二頁

此に水入り外が上段の間といふ事と申上

まあ 高ふ 高ふ 高ふ 高ふ 高ふ 高ふ 高ふ 高ふ 高ふ 高ふ
甘露台の段の音請は理也 いかたやあるから 普偏の信者なりは
いかたやあるから 甘露台一三を誠の甘露台を思ひ 甘露台一殿は 三殿がついて出たから
らん高ふ積上でもよ 積上は いかん 甘露台一殿は 甘露台一殿は 甘露台一殿は

請しよったあ世田外は云ふも道理や
上段の同草地にさし戴き、外した物で存まを哉
人の甘露台の理の音請はかり座であるから一殿は
まあ今の建造物甘露台は真大、廣くはいらん 勤さへ出来りやそ水でよ
信者でも人の甘露台事情にみちびいて 甘露台一殿が大々として二殿を段下
下の者下も上へ 外へ満足さしてや水上に廣うとつてすぼつとしてあつて

三殿の方
はいかん下の方おせく にはどうもあらん上の方は 廣うはいらん
北の上段の間 順送りにして戴き、外たも
なか外でも無茶らして戴きますものか 御願ひ
現場の音請は 音の
さあそ水はどふおといふふたしておけ甘露台といふは 調子のおがはん
人の甘露台一殿が 甘露台一殿から縁の甘露台は始まつて来る
にしておけあ水が甘露で あ水から始まつたものや
おかたより七下り
甘露台の音請を
ひとこと 話はいのきしん 句ばかりを かけておく
月日思慮が方々いふかけをすのは神の心下
深い心があるお水は 水もとめりておいほどに
甘露台の音請を
道の
みおせ田外のは 下んがのいらぬ者はおい
月日思慮の甘露台は 傍者一同は
よき地があらは 一列に 水もほしい下あろうが
六五

五つ いづれの方もおおし事 わしむあめ地をむとめたい

甘露台にのりて来いとは

六つ 無理にどうせと云はんやふとこはめいくのむぬしだい

助十場所甘露台が

七つ ふんやむんぢがほしいから 價はなにほじるとして

甘露台は

八つ 庭敷は神の田地や下 まいたる種は皆はぶる

甘露台のつとめ助十場所

九つ こは此の世の田地ならわしむしつかり種をまこ

神の用木もつて人を助けさして頂くために

十つ 此の度一列に ようこそ種をまきに来た

お教祖の様に五十年もくるとま本僅か三年で

種をまいたる其の方は こゑをおかずに作りとり

明治三十一年十月一日

飯降政甚建物所許願

月日思慮の甘露台が

さあ〜 三才ぬる事情 飯降家の三軒たてりは 飯降家の五百請をするときふのをい

として甘露台一飯二飯三飯と云ふ三棟

を出したる五百請は願ひ通り 申す神の思慮の理の

筆の中に 甘露台一三三

かにさとしおく 三軒と云ふたあや三軒この順序あざやかかわからん

甘露台前表一飯表三飯中三飯と

三軒棟をあらべる

甘露台にかた一飯三飯と

人教集めの理の

ふ五百請 始めかけ かりかけ かりかけたらあとははむどさんゆつ

甘露台一三三としづの上からの句を見い

くりヨすぬて 三軒棟をあらべる 三軒出またもう一軒あ

お教祖九才より二十六年同正月十六日甘露台前表申席昇天より十六日甘露台三飯

と思ふにこれにて建ておさめや三軒あるのや句を見い名をつける

表お教祖百才理の御由より三百年自願の甘露台中と

三軒の理があるあざやかかわからんや

としづの上から

甘露台一三三の事情のほか
 一通りの理から尋ねたらわからん、いつの理にかつてもわからんか、親
 子諸共く（神がもういませけた）いせこんだ理親子諸共の理棟三軒の理じつさい
（安子せ）分らん大工といふはふんと思ひてゐる表大工に裏かじや此の理（信者一同は）困子
（甘ろ台一三三）分れ三軒たちおらんたよう思案して見よ何年いせんから食物つ
（信者一同は）家を賣り拂ひて始めた京都と云ふ道のとに甘露台事情を建ちから神の恩意の分らん
（甘ろ台一三三）くりた田地や世上から不思議に思はにやおらん此の草すはへの
（甘ろ台一三三）本部の中（甘ろ台一三三）中にかう云ふものがたつ裏はかじや表大工とさとしかけたる順序の
（甘露台一三三）理から聞き分け三軒おらんでたておさめや下いさんでかゝればいさ
（甘ろ台一三三）んではたらかカリの日は祝ふ様にして々小間者様とりやうでまちが

うからどうもおらん千のもちあらせつといひたいが三分より（人間の）分らんむ
（京都）さくあしははさ小いおしごとでけんやよう間分けてく小にやおらん
（京都）押三軒の建家は小にやすむを命座いますか
（甘露台一三三）甘露台一三三の建て、
（甘露台一三三）さあ三軒三軒三軒で小でおさめふしんやでかりやかりやいぐどくた
（甘ろ台一三三）三般と
（甘ろ台一三三）びたてかわりては理はおなじ事一此の理をはづいたら神にむかふも同
（甘露台一三三）じ事三軒三軒三軒一理さへおさめたらそれ水でよい年限刻限で切
（甘露台一三三）甘露台一三三の表三般表三般中甘ろ台と
（甘露台一三三）甘露台一三三の親三般の親三般の親
（甘ろ台一三三）がやかわけり
（甘ろ台一三三）三軒の中のものた小か水のもの
（甘ろ台一三三）かもあい同じ理
 明治四十年四月九日（旧正月）迄午後九時子
 内々兄弟一線計り申す同より理の取遣し必般々懺悔致し
 六九

此度の神様の御自由を以てて、懺悔、悲心入心身に取極め、七口後仰本席様へは、孝心之通を備へ、御安神々懺悔、又姉改修、朝より身に煩ひを委せて居り、御から猶々出来得る限りの懺悔致し、御又平野様にも、飯々御諭、世に世に候事でも申上るや直に

さあ〜〜〜
こ水までの処、比白とりあかひ〜〜〜
甘露三段をぶして来た
とりあかひがころつ

と心にあさまりてある程と、譯此は身の処あによの事もゆるしてやろう
月日社甘露三段をつぶしたり
あはれとさ一度といふ理、ゆるすにゆるさ水んによつて三水をしかりそふ

甘露三三と
して三軒あちらのものでもおしこちらのものでもおし、離れのものでもおし、み

かほかよ、三軒の中にあつた仲の者の理の水のである、こ水も誰水のものか、水のものごと
甘露三三と
甘露三三と

甘露三三と
甘露三三と
甘露三三と
神の道、こ水がろつくとあらう、理によつて不自由せにやあらう、め

すらし道や世界の鏡にあらためてしまへ
世の鏡として、甘露三三と、世に甘露三三と、心を改めしませ

さあ〜〜〜
天理の中が、つかりかわりてしまふ
谷盛から出る甘露三三と
目止水におりて来ると云ふは、出来ん事と思ふやあらうか

出来んが神の道、人間といふ身のうち、かりものといふは、皆聞いている
何事も神のまに、通事と心にまた、おは身のうち、かりものを

聞いている理、がふかつたら、さかんに同じ事、之水よく聞か、方け
さあ〜〜〜
さじつに三棟〜とありてあるから、甘露三三と三棟を建てる、と云ふ事を

三軒の理、さへ心に、譯りたら、道は、一軒の、水よ、ふ心に、あさめい、くれ
明治四年四月八日、百日、午前六時、百日、さしづ、五八頁

えうして、本部、内々の、処や、こうして、三軒棟を、あらべて、ある、一軒の方、たつ
さしづの中、あると、さふ、事が、あら、中に、甘露、三三と
七一

ておい〜 たてんとすれば 樂しみがなほ 是も第一おからへての道

中甘ろの道を建てること

中甘路台が道の中

天理の道は

余程大もうか事である 治まりあいつへは あるもあつても同じ事

さあ〜

明治四十年三月二十二日(旧二月九日) 百日さしづ 十六頁

奈良系様建物の屋敷何処といふ御願

神の自由用知んから皆の心に安んじが 湧出神の自由用は人間の思

惑とたろつとちがふ何によれ方之道もたちきつてある 甘ろ一殿 あちらでますば小こ

政子に月日ナリニんいさしぐの上から 藤の甘ろは政子である

ちらやあまほ小たる事は ぼつ〜 ほどきにまわつてゐる事らんか

本部のま、い 本朝のま、い 甘ろ一三三と印を打てくみたて

こ小までの道はとほりと思ひては 神がつか〜とほさん 皆志ろしを打て

神の心と

くんや行く様おもひの心がちがふたら何によの事もくひちがらで あはせん

月日の思惑の甘ろ一三三と三棟を信者は 甘ろ一三三三棟の在る所とする処から道の理を

何事も出来やせんや 之小を一つ心得にやからん 月日ナリニみ社をたてるがため 是こから道理はあしかけ

さしづの上から

る どういふ事始めかけるから 堂々はおしの 堂々さあ〜 甘路台ひかた二殿 堂々はかじ

や表は大工こ水は 一つの 堂々やで之小を 聞き分けたらや 合らん

甘ろ一三三 甘ろ一三三と印を打てくみたて

あ〜 甘ろ一三三 甘ろ一三三と印を打てくみたて

は神の見えを以てつおぐどふいふつおきから 甘ろ一三三 あと〜 かはり〜

甘ろ一三三 甘ろ一三三と印を打てくみたて

三殿 月日の社甘ろ一三三が 出あけ水は 甘ろ一三三 甘ろ一三三と印を打てくみたて

つあが、あくば どうやもこうやも 商衣と表はた、ん どういふ事から

甘ろ一三三 甘ろ一三三と印を打てくみたて

月日の社甘ろ一三三が さしづ通りに天啓者が出たとあふ事か

席の言は葉出す事 聞き分けるから 神の自由用 聞き分けて

先に敵の甘ろ台が出て来るが

来るやろういかに一つ話も聞かす分けにやあらんさあ

甘ろ台二敵（甘ろ台二敵と云ふ）甘ろ台二敵と云ふ（甘ろ台二敵と云ふ）甘ろ台二敵と云ふ（甘ろ台二敵と云ふ）

表と前表といふ座敷（甘ろ台二敵と云ふ）表あつて前表はあつて（甘ろ台二敵と云ふ）この水一つの道理き

裏甘ろ台二敵表甘ろ台二敵中（甘ろ台二敵と云ふ）天啓者甘ろ台は

さ分けさあ〜尋る処と〜〜〜つおぎ地所どこ〜も持つて

さづけ赤す処よりおさめる所はあ

行きかおむ南より持つて行処おむ

明治三十一年八月二日

御本席の南の方へ五百請被下事願

信者同は 又故事等に照らすを助けるがため而教祖親子安子と天の命を捧げ神が

よう聞き分け親子もろとも座敷おせこんだ理おむてみよ

月日の社甘ろ台（甘ろ台二敵と云ふ）神が祖の（甘ろ台二敵と云ふ）さしづのよとこまでおははしてもらうと云へおいてははるかた

あり 子供や あり女やと云へてはあふま〜神だましたの

信者同は さしづにかま〜さとしておいて月日の社甘ろ台事情を始めたのであるから信者を

も同じ事 神がだましたのやあいかやし〜 はおしする

から信者同にさしづを

十方ったへいと水さあ〜理の 喜請〜ど〜ありとさあ〜甘ろ台二敵事情

甘ろ台二敵事情 而教祖存命中にはかかたとして前表かじや表大工中は月日の社而教祖と而示レ下

かじや 表は大工この理と、から出たかかんが有り見よ

甘ろ台事情と云ふ 信者の心に 甘ろ台事情の理の

さあ〜一たんをうつて あらためかへ たちやと云へ 今一時云ふや

而教祖存命申 甘ろ台二敵三敵と

あ〜ふるい理に棟かぶ三けん〜この理どういふ事〜これは聞い

た者七聞かん者もある 聞いた者たに事情ふしん〜

甘ろ台二敵を始め 一敵裏二敵表とわける甘ろ台二敵事情

はじめ又一けん名は一つ〜かこれ どうする

甘ろ台二敵裏二敵表と云ふ 天保九年に 神が

順序 聞き分け親子諸共休せんだ理 聞き分け誰かに

おがた二敵二敵と

彼れに棟〜 軒しつかりたちならべ

の意味合が信者の心に甘らる
さあーさしづ〜
わからん事情あらたづぬくればたづぬあび順序

道の中に月日の社甘らるはが
せよまるなら將來つせよまる理とさとしおこし

棟敷三ホんの理とたて申すね

甘らる三段三段の
さあ〜三ホんたちや席順序理もつて順序の理をもつて制限が
神が定めた

に現はハ〜さしづの上から
いらしおこし

又押して西の方と東の本席様の方と又南のたてます方
との三ホんで有件哉

さあ〜さしづぬる事情〜
もう一けんはあんでもと〜はせん〜
甘らる三段三段

事情さしづの上から
と信者の心に
に三段月日の社甘らる建設の
理にさとしたる〜どうありありてはらわ順序はこびか〜らたや治まり

に〜い

又

さあたづぬる〜
かりといふさとした理にもとづけばとん事理でも

ととづかる理まぢごたら〜とん事におるやらしれん〜
本初さま、で進んたら道の
甘らる三段と出るから誠の甘らるは

序あるかこ水酒さ〜
順序もては席順序をさ

〜
め今日は風吹く様ふ又あ〜めはあけにやならんあ〜めの順序はあ〜

〜
にあるもう〜こと〜
今日の白までかげすがた見える

〜
様ふものゆせ心とことあるかたのしみなくしてかたに居るも同じこと

信者一同の心に
こみわかるか

明治三十三年十一月二十一日(旧十月十日)午後八時三十分
制限おはふし

二段が出てきしづき 又三段政子甘ら台が出た方までは政子甘ら台はさしづ通り道であるからもう
又出て聞かし 又々さしづ通り道やあければ通れんかはらん

甘ら台二二の事情は甘ら台建設の 甘ら台二段三段とづくに 長く道なのである
おんおじいト 同じさとし いかうまで長いや ノでもえれ一

これは三つにすむ 比喩の心にあり 神が 政子甘ら台事情を始めて
つての事情どんお事情も はかりがたさいそこ出て 聞かしおかぬ
さしづの上から三つにすむ話と 信者の者は道のため一心に働いて来て神の恩恵が全らんかたあ

はあらん 何をしたのやとさわかたてる様お事ではどうも
政子甘ら台が道にむかひとらしてより四年自十三年自は十三年 にかつたら政子甘ら台を
あらん まあおつとり四年五年の 日がうつるまああふた

道の世界の 月日の社甘ら台が ともあらん政子甘ら台は月日の社とさふ天啓
と世界からいふとさにとふ云ふ 印がある印を持つてめど一は一代の理
をもつて出ている教祖は百年道は一代の理 政子甘ら台は百年から天啓のつむぎ二代の理 道のたてかか

二代は二代の理 おんどきといふ事か あるともわ
政子が道の三世の親とおつてもこれは教祖と一理の様にならんや作け政子甘ら台は僅か三年
からんどんお事あるとわこれは一の理の様にならんやたのしむみおかし

の間で三世の親とある甘ら台は 生涯未代であるから 道がある だけは何んお事してそも道

長いといへば ながい 人間と云ふものは 其のほと云へ

つてゆける 人間の ば 先のはおさまる ざりやと云つてさしづより外に一つの道もおい

明治三十一年七月十四日夜 昨朝本席席身上御願申上は夜深に尋ね出まよの御世付願

刻限が来て出て来る甘ら台二三の事と とう云ふ事話しかける

あら皆ふ心せしづめて一つの心で 聞ソてこれにやあらんとりませの話
とはありとあがふやよの事情 聞き分けしこれ 長い間や年限

長い年限の間かんかん 苦痛といふ道はまあいよ一話

したる道の上から見れば 今日の日といへばどこからいんお事云う

道の世帯の信者の心には月日の社甘の旨を見なすべし

か皆世帯に「あからがある」あぶあいはいと去ふ尖つ水てとほりたる

信者の者はまだ神の恩恵心か

月日の社甘の旨と道の中に

昭和十年の日は信者の者は

まだ一寸水からん

つ水てかへる処もわからん

今日の日くみんは

月日の社甘の旨と去ふ事と

月日の社甘の旨と世の世の親と去ふ

母を揃へて聞く「聞く」標ふ日が出て来る元といふ一つの理をきく

月日の社と去ふ

に来る元があけりや聞く者ありまへ大たいの話元と去ふ一寸前

甘の旨と世の親と去ふ

世の親と去ふ

信者同には

もつて知らしおいたる元といへば小さいものく何が何やら分からん

中教祖昇天当時の事は信者同には

標ふもの二十年の理は「あり」ましく「あり」三十年と去ふ

明治四十年迄には

中教祖昇天明治十年より三十年の年迄は

分らんもう五年く二十年の間がある十年の年限ありて

教祖が本席にありてとて甘の旨と去ふ世の

元を聞く、分けてく水る者があはれここ二十年くどきく話をすする話

もすれば心にかんじておさめてく水るやろよう聞分けつとめ一糸

人の甘の旨建設の

は出来ず甘の旨建設の世帯分らんから取りはられたあはれでもう

去ま、やと云つた曰もあつた世帯分らんから取りはられたあはれでもう

つけおに置かん甘の旨建設の世帯分らんから取りはられたあはれでもう

信者同は甘の旨建設するのやと

いふやろ皆話して居るやろあはれど何やらかやらんどう

かむこうや甘の旨建設の世帯分らんから取りはられたあはれでもう

分らん本席の道もどうあるのか天啓が抑えて思ふ様にかん本席の

らむ本席だらけはせんばかり「たちやかむ」て見よ皆かりやだてに

たてかへん今日はどこにむかりや

ほんにあるほども去ふ

分らん

はほんにあるほども去ふ

分らん

はほんにあるほども去ふ

分らん

にむ甘ら台一殿二殿とかりや五百講が 首は相續に 十年限がたぬ先の 道から神の
先水へ にも出末きたる 年限たつ たり本 順序 草ば (の中か
話と)

らの理を聞き分けてこれくわや、はあしといふつゝ思はしらといふ
甘ら台一殿 二殿 三殿 神が 三つの中は月日の社と長く一人道の道とりの

一年二年三年といふ誠の 一つ水とほりた一人 順序の理が
本部に天啓が仰せ道が

あるわい、さしづまりた日あるわい 一 あつた時にはどりすむか
天啓ある時の 本部は

あつた事はさしおいて人間といふ心はびこりてほびちりて、それ水につぎ
本部の事、やは道か

そいやうの 一つ水とほりた心 察して見よ 順序にあるかあらん
月日の社甘ら台とむ 信者百が さしづ道りか

か聞き分け一つの理から心を合せしかうであるとき (は心のさ
この世界に月日の社甘ら台の

ぐりあいうたがびは あらうまいしやうこ 現水しつけはまちがひ

はあわうまい 一 日 一 見へくる 月日の社甘ら台の出る年限を 信者百の
たのしみ

の元と云ふは、ちいさいもの 谷底から出る甘ら路台である

明治三十二年七月十四日 夜 本席の事情で御座ります

甘ら台かかた 殿事情の 甘ら台一殿が 二殿の 三殿 月日の社甘ら台もある
さあ 中には一つの理もわかる 又中には一つの理もある 一 殿

二 殿 三 殿 一 二 三 此れまをちよい 筆先さしづに 甘ら台事情
話したる 一 二 三 話しかけ

た 一 よう 聞き分けどういふ話しかつたへるから 衣はかじや
甘ら台一殿 二殿 三殿 三つの中は月日の社と長く一人道の道とりの

衣は大工 聞き分けは 神の守護 十二下りの止は大工此れさへ聞

き分けたり 苦勞したいと云てもでけんが 神の守護はたらきわか

甘ろ台二殿
りたが、裏はかじや、表は大工と云へば、何やらといふ中には古い

話きいている者もあるよう、聞かすけ

おかげらま下り

ハッ
高山本館に甘ろ台と書かれた行ふらば、中教祖様の一言甚ふきしぐも持て行け

九ッ
山之中へと行くおらば、あらう、棟、梁、つれいわけ
中教祖のまじぶを見定め、甘ろ台は人があると、殿親様かこぞくせして下さいました

之にはこぞく、棟、梁、つれいわけ
二殿親様本館に通つて、合符をして、たまへをせし
甘ろ台は月日入り込んで用木をきりつけまつて、もうじきして下さる

たてまへ棟、梁、つれいわけ、かんか

オド
四人棟梁がそろつたり、一列大工がそろつて、道がおさまる
このたび一列に、だいくの、にんむ、そら、ひま、た

明治四十年五月三十日(旧四月十九日)午後十時 百日さしづ
中本席様身上又々、激しく相成、刻限の御發
五頁

さあ〜 西と東、ズート、ますます、ズート

さあ〜 あちらの不足、とりこみ〜 こちらの不足、とりこみ〜 こ

人教の 本館の人数の さしづの上から、あつとくさす、二殿の人数の、もあつとくさす、三殿の

ちらの不足、とりこみ〜 まつ、す、ぐ〜 大もう、棟、梁、つれいわけ、お、小、ぞ、お、か、ひ

年限の、同先の年限、今と、お、小、ぼ、い、ん、か、事、も、出、来、る、さ、あ、

二殿、二殿、は、
教會と、お、り、い、建、家、始、め、か、け、た、る、今、の、あ、り、か、た、ち、の、様、お、も、の、ほ、ん

け、あ、る、誠、の、甘、ろ、台、と、お、小、た、り、天、より、天、啓、を、お、受、け、る、の、下、あ、る、

の、美、しく、お、つ、て、は、ん、ま、と、い、い、たら、甘、路、台、は、す、つ、か、り、兩、う、た、し、の、も、の、也、

甘んじ

敬祖又から甘んじ

道が四つにあるは敬祖又

しつかりむすんやく一坪しほといふは少則々に北出したる一坪四方か

二段一殿道はこれだけ甘んじ本都は年限はこれだけ手ははりかん様であるか

ら出来て来たる南北何間東西さんほちよといかんが人教にた

本都一殿二殿三殿とこれだけの道

とへて見よさんやむあいやあといふたらこれだけの事やらにやあらん

明治四十年六月四日午後七時(旧四月十四日) 二日さびづて四角

中本席様御身上市障有教長様始め宿直員同出席の上

主時刻限の御論

ウーウー……

昭和十一年に天啓者改子甘んじか世に出たり

さあ〜ウーウーさあ〜 今日一日の日はあたのもし〜 あれもできた

二段事情

神の自由用は見へかつた

これら出来た出来たと云ふ事でもこれと云ひしてきつた事おにも見へよう

誠の甘んじが出て人教の者は

さびづの上から

本都も三殿も一殿も二殿も同じ

まい〜又一皆〜かへる 歸つた者にはおしするは西も東も北も南

天の理下おかし道である事

もちよつともちがはぬ様すみかりすみきや八方キコトもちがはぬ様

順序の理さとして〜これおからか〜るあら日々たのもしこれだけ

あちら こちらと一つの道に派をわけ

すつきりはおししておかにもあらん〜あちらどうやこちらどうやとはおし

るから台つたまよめるのよ

おさしづきとしておいた

〜おま〜くでは しまがいつ〜どうもあらん せこでいふたはおし

二殿

一殿

といふたら一ツ二ツといふたら二ツ三ツといふたら三ツ一ツの理これちよと

事情が 出来たり

天啓者改子甘んじ事情が昨日

もちがはぬ様 順序はかゝるあら 日々たのもし八方むちがるどんか

思意通り道が出来たり十方お道にかゝるおあ〜人教はいつていた

者もゆたか〜 日々おま〜い〜たおあ〜 ぞこでいふともお〜

月日思意通り天啓者が出て来た

しては自七の様にふるそうしたる 道の中を神様がおいそうじせして甘んじり道

一列にどういふ事 出来て来るとも

つらあつめする

わからん二水を見へ先から

さしづに

天理の信者

こははふしのとめにしておく

子甘ら

月日の思惑がある信者

かり心一つによせるは

を治めたる

本邦員は神さしづに

事治めよの聞りて

明治二十一年十月二十九日

おとし

神がさしづに

お道の中に甘ら二般

さあしくどうお事のはふし

きまる信者の中に

さしづに

あし平分よき事

道が出来るも

信者の心

かある順序一つの道

さしづに甘ら台が出来る
あれぞかうもなる

三般事情月日の社が

すあちらにもある

甘ら二般裏の役

りゆはん一人の心を先

部も甘ら二般も

もわからんすつさり

理も取りはらう

くへんの処にある

まいた様

明治三十一年五月九日夜

増野正兵衛自身上二付書意のお指

しばらくして

お教祖百十五才の理がきこれたら神の恩恵の甘みの事情

さあ〜また〜
甘みの段ニ段で自らの社甘みのこと
らせん〜
一事情
始めかけるどういふ事情だしかけるか
を始める道の中の本部教念の
高事の処〜
是までの処〜

さしづきもかて

お教祖百十五才から三才

まあ一寸こい長らくの処どうやかうやといふこいだけやすむ
お年回身と助け
ある百十五才の理の切目自より甘みの事情を
本部の所と甘み

おんだけやすむ〜
事情是から始
めかけ高事の中こいこ
い本報と甘みの事情と

台事情と
神の
信者
甘みの事情は

いふとららん〜
さあわかりくる日まつた又のち〜
事情

か始まる
甘みの〜
鳴物
此の事情まあ
一寸あらんから
信者の心と

甘みの事情を表に
月日の社甘みの事情は

理をだしたカリかけたら
分り来るさ
いしよはふわ〜
したものの

人間の心と
月日の社甘みのすること

誰かがどうしよう
彼がこいしようと思つて
わでけんた水にささ〜
うか

水にささ〜
月日の社甘みのこと
信者
甘みの事情を始めてい

か集つたこの理
分らんから
とめ〜
冥き〜
あちら〜
も渡しこち

て来た甘みの段もニ段も
神の
始め来た神の
道も始めて行は
信者向は
はこび

ら〜
わたしよき
お
理にさそは
こさしづか
ありし
す小は
りき
に〜

い事しかさしづせん
こい
一よう
通す
分けた
やあらん
ありもの
三人
又は

とては
お教祖の
信者向は
お小
本報の道さへ
たてりたり
よい甘みの事情は
信者向は

お小
神の恩恵を
つづして
しまし
小では
神の恩恵の
甘みの
道

んにも
分らん
うも
小い
したる
神の理
がう
わ水
理か
ある
か
おい
か

此の理から
分ける
道
と
お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

九一

お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

お小
は
お小
は
お小
は
お小
は

菅長は

そとに

九二

真柱のくらしを

とさふやろけふはでやうとおもへは出たがよいやすむと思へはや

甘ろ台事情の

神が道の中に

んでおられた日目の社甘ろ台と

が本部の理

すんでわよいもとは人血祭といひふせにみをも人血祭と

いふ此の理

をたてしゆく

百年祭より月日の社甘ろ台一案が

が命ら収ほおんに七人からんやうきあそびくよう酒き分けてく水

仰教祖あつぎ月日の社甘ろ台

甘ろ台三飯

一飯

と道の中に

あとから出て来る同じ社甘ろ台

むかへ一人

表

裏

三人ふやす

あといふ事情は

本部と

てがはり事情

押して三人ふやす事情の願

本部の理と甘ろ台三飯事情と

百年祭迄に

甘ろ台三飯と始めて

さあてがはり

今日の日

平がわりといへば其の日く

さしテの上かり

印を定めるがよい

押して其の白く印を定めるといふはどうかふ事でありませうか

道の

さあ真柱にた小そ小か小そ小といへば又人といふ真柱に本

た小かよいか小がよい

神の思慮の月日の社甘ろ台

うと印をこしらへてもらて其の日くしるしを正めてもらへ

押して裏表とはどうかふ事でありませうか

裏甘ろ台三飯表甘ろ台三飯は月日の社甘ろ台と云ふ

さあむかへへのむ切へとあるから裏と表にふる聞きわけ

こぼらくして

百年祭迄に神が定めたに甘ろ台三飯三飯と出て来るも百年祭迄に信者一同が

さあ今晚の刻限は何ようあるとも今晚からもちもち

月日の社甘ろ台と云ふ

甘ろ台一飯

甘ろ台三飯

ひにやあらんせんこく一つの理にさとしたるた小がどういふか小がわ

と信者一同はさしグを

月日の

甘ろ台

甘ろ台三飯は裏表とある甘ろ

かついひた人々一つに切りてあつめて真柱へもちて行つてこれ

甘ろ飯は表とある

月日の社甘ろ台一つに甘ろ台がおさまる

本部甘ろ台一と月日の社甘ろ台

よいこははどうかふそいかりこうあると席に足守ぬて一つの理に治めると云ふ

明治三十二年七月二十四日

標本 振本宗太郎及家族共に本部より引越被下事存小三階より住居頼

同日社甘の台家族が本部へ引越と古事事は 甘の台一級事情也 甘の台三級事情
とあり 何か萬事尋ねにや方るまいせん 〓と〓たるだん

〓〓〓事情にだん 〓〓〓人事情もつて尋ねる事情も小

はいかぶ事情 早く〓〓〓と〓と〓したるよう聞き分け
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

ふるき〓〓〓道あつて〓と〓したる 〓〓〓事情よう聞き分け
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

く諸共引き越すがよいと〓〓〓すお水とあとい
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

ふ順序きまつてたづぬこの順序あるかせんぬいにはじめかけた
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

る表大工に裏かおやく 時来一つの理かくばおらんお水とあ
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

あ〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

ぬかけ〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

秀百政子と本部に 〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

つ小て 〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

ふ必る身収てさしづ通りす小はまちがいはあい教祖せんぬいつ
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

たへたる理けす事わけんかやくこせばあといどうかるかとい
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

こか何時ありと一情いむにきいあとい 〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある
〓〓〓の思ふ神の思惑の事情やある

しんまだ年限が来かいから

てはこんでいそいではあらん だいにいふ事やでやり見こつてはあらん
押して子孫と仰せ被下し知 續いた子供でも一人のこしておいて
つが事やあります哉又は深田徳次郎でもつが事やあります哉

中教祖の

さあ〜 尋ねる事情〜 いかあるも尋ねるにやあらん子孫

のうち〜 に生れた者ある〜 ころはふるい〜 二十年やおい

おつと前々事やあるが皆にあらんからい さんごにさとしてモ

どうもあらん さんごやうやわさ、い水あう〜 たちこしたる

甘らら〜 殿と さんご事やは さんごに甘らら〜 人間定めてあるとしるし

だん〜 おくしてしもて 何もどうもあらん どうおつたといふ様

てあるが本都から出さうが 神の首の事に来ちやいはおい本都の道やも

お事やはあらん 神一つの理 あはこい 今にフ〜 いてあるとみ

百年祭から中教祖の理を甘らら〜 といふ所教祖の子孫が 神の思感やおい者も

およみこぶ あと 仰げりて〜 うまいたものある 今一つ やとひ〜 小いはあ

中教祖が 五教百身と古い年が 中教祖の子孫月日の社甘らら〜 理をゆづり

あらん 血のけた者ある たちこせばす〜 かりもの やるがよい 念人

だもの やなといふ様にみかんか けすきいにしてあ〜 ともとどうしたとい

中教祖百十五才理が抑〜 けり甘らら〜 三とと教祖の道と 神の思感やおい者も

ふすは びらいて素た理も おおし事 教祖存命も おおし理にあら〜

ふ事と信者 同と 聞かておこ〜

明治二十一年六月二十三日 分教會設置の願

前畧 甘齋を〜 人間定めてある さんごも 一白 あるたのしみあると

云ふ事をおさめてむらいたい 百年祭と古い年が

お筆先 二房 山中と古い道の先の見とつし〜 かん教會の中へ神が〜 人教の心も

六 山中の水の味へ〜 けりこんで けかある 水もすま〜 ことさ

月日思惑に

さしの上から甘らむを見かす

三九 日々に心つくする其の初はむねをおよめよすはたのむし

本邦教念へ神が

信者へ向はさしづの上から甘らむを心に定めて

三〇 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

本邦教念のかつて心を 月日思惑の甘らむを見かすまぬ抑た道とある

三一 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

ごもくさ、すや、やかたしてしをたさり、あともある、亦はすんやあるあり

三二 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

神の心に甘らむ者さしづ見かす神にかかふ人

三三 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

唐人が日本のちのり、り、みんで、あ、に、する、が、神のり、の、ふ、

三四 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

だん、と日本助ける模様、神の心に甘らむ者さしづ見かす神にかかふ人

三五 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

この先は唐と日本をわけるや、此れわたりたら、世界おさまる

三六 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

いままも、は、か、か、た、る、心、わ、か、ら、い、や、世、用、行、な、や、と、さ、ら、い、り、を、あ、り

昭和十年からは神が甘らむの境内に今よんで表に出て、信者へ向の善悪の心せ

三七 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

さしづの上から本邦の道は月日の社甘らむの道とてははらひかたむくもそうじするあり

三八 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

日々、に、寄、り、来、る、人、に、こ、と、は、り、を、去、へ、は、だ、ん、

三九 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

い、か、程、の、多、く、の、人、が、来、る、と、も、お、に、も、あ、ま、じ、か、神、の、引、受、け

二世の世の

月日思惑の存した人教の道の

四〇 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

珍らしい此の世、始めの甘らむ、此れが日本のおさまりとある

四一 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

高山にひいとみずとが見え、誰れか目に此れが見えんか

神の目には

四二 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

だん、と、い、か、お、話、も、説、り、て、あ、る、た、し、か、お、事、が、見、え、て、あ、る、か、ら

月日思惑の存した人教の道の

四三 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

志やわけせよ、様にとて、お、ぶ、ん、に、み、に、つ、い、て、く、る、こ、れ、を、た、の、し、め

四四 此れから高山地とてははらひかたむくもそうじするあり

お、に、も、か、む、こ、う、よ、く、つ、く、し、其、の、上、は、か、み、の、り、い、ぶ、く、見、え、て、来、る、お、や

四五 だんく〜と十五日より見急かける （此人は信者の道の中）

四六 此の話ど十の事とも云はんやか見急イ来たは皆とくしんせ （本部信者同の中から悪と善と）

四七 高山の日本の者ととう志んし 命ける模様も之小わぼしらや （甘ろ台）

四八 そう人と日本の者と命けるのは （月日甘ろ台） びつとみずとをい水イ命るで （月日思惑心の道）

四九 日々に早く勤させきこめよいかか 難も皆白のがれるで

五〇 どの様おむつかしくおる病やもつとめ一糸で皆助けるで （月日社政子）

五一 勤めやもどらむ勤めするあらば 甘路台まつとめ一糸 （天理の三世の世）

五二 此の台をとうむふ事に思ふかか之小日本の親であるや

月日の社甘ろ台三世の世道の親や信者が

五二 之小さいが首大志んじつ思ふから月日見命けイ皆引受ける

明治二十一年九月三十日（旧八月二十五日）

甘露台之地に新築せし神床へ神を齎りて祭る日を伺ふ

皆は神に奉承なるが言奉りた神の言奉り也

さあ〜たぐねだす〜 何よの事もよう思ふ不し〜 （くん）

甘ろ台の地に神床を新築せし神を齎りて奉承る日也

定めた甘ろ台事情と云ふ 刻限のはおし （きん）

たのやさあ〜 今までおが〜 （の道は天保九年より出来た道や） の所よりむけた処やさあ〜

明治二十一年の

信者入者が

教祖身をかりてけりつうのあつゆくのあり様に

こいまでの道 どうむしのぐにしのけんから 一才の道をやゆしたる処 （天保九年から） さあ〜 （おが） の道 （五十年の道） をかへし 又 （たいせ） かへ

又 （世の世） はじめだし此の理をよう聞き命けてくねねはあらんさあ〜

甘ろ台事情一段でも甘ろ台と云うていふ二段でも甘ろ台と云うていふ
教祖理より自から三千年祭の
あちらでは一寸あかいこちらではあかいさあ
もう十分の処
三八五年昭和十年
一ニ方と云ふ道のことか
政子甘ろ台が四月日なりんか
は八分までもきたる処もう二三人の処又刻限のほおしかり
刻限さしぐの上り我々甘ろ台と
はじめ

明治三十九年五月二十八日
しばらくして

人の甘ろ台
大きな本こういほしいくくく一本の本からじようやくできたら
人の甘ろ台 やくそく

人の甘ろ台
本の本からおいくく出まるとかういほしいああ
かうてくくる者あら
せんか

本と仰せ下されまます処理の本でありますか
現場の本でありますかと申上げ

明治二年から 市井部から所せかへて大埋の道

かゆい話してあるもう一度始めかける ちよんの始めすると云い

たのしまして たんのお大きな本あるね 一本かうて かせと思へばたい
人の甘ろ台を本部が 理が高から

道の世界にはへいる甘ろ台を信者がかうて道の世界から切つて本部にあめたり
そうであるけれどかゆい ますうてはるうてすれば十分の本出ける

あらんやいどうでもわかつても高うてもあらせんか
からせに金
人の甘ろ台

かゆい水とも出してく水とむいわん おかしい事云ふとおもやわふす
人の甘ろ台は年限たつてから出て
理か

此はあんでも年限おゆい くと云ふ大きな本はよう買うて
甘ろ台

ほしいかあ かくてもろふて大きな本
グーリーと出来たり
人の甘ろ台が
出て来ても神の
たのしみやぐ とうでもころむわ
年限おくいてむ心のすむ様
人の甘ろ台が
一六三

にかづく〜ああと口〜声かふとゆふ事まつてゐる〜

前管長
教長公より買ひますと仰合申上ぐ

買ひて見せてく水多か買うてやあかそんあらまつてゐるよかつたああ

〜さあ〜よかつた〜 (百日さしづ三頁もあう)

明治四十年三月十三日 (旧正月廿九日) 百日さしづ一〇頁
教 會 長 出 席 の 上 の 御 咄

〜あ〜〜4コト 一言とくせえあ〜〜ああとほからずの内也

ひ前カもつてたけいそうふものかへといふたのやあひ一本買ひてくれ

といふた日ある〜〜そんあら心わしめ買ひてきた日あるかうと

本つたによつておさへてある一本かうたりすだ〜〜かうで〜

一本や二本やあひ買ひてきたらよけに買ひで〜〜あつてち

かういもどうやわこつてわかうやどこにもあひ〜〜とおむつたあ

あひど席が見えあるかうといふたり書買ひていふてくれ

あるものかうねであきらかに見えてある席にかはせ〜〜買

う〜〜席がかう〜〜かはにやどうもあらむ〜〜

あす白かへ〜〜約束せ〜〜今夜うらむか〜

席のたのしみにかはすね〜〜三本や五本やあひでさあ

〜〜〜こんな事いうたら何をいふかとおもふやろ一本から始
甘の旨があとがり 何本か
用木は甘の旨が 日目の社甘の旨一本
りあとへ 何本やらわからせん あるものしつていふかうたとい
本部にあさめい

どこへも持つて行くのやあむかうたら早く御木しみの道を取締て

くしく水にやあらんはむか 々々〜 甘の旨と本部に
こりやうるとあつた

らなんとなつと 谷へがくばあふまひ〜

教會長が前の刻限に買ひて渡すと
申さしと申上

さあ〜 本部が甘の旨を 甘の旨は用木を
一本かへ 席はもつとかう 三本や五本やあむ御木し
に買ひうのや

おして

さあ〜 甘の旨事情が 政子甘の旨事情も 敬祖の子供秀司政子に
むうこ水 始まりたり 始まる 子借に心 配さしやどう

あるかうある 國をへだて〜 もどり来る此の道のためたのしんでかへ

りて来る 神一つの理 あるいはこそむとりて来る 心配ばかりしては是

ていら水んわい〜 比白かうそやあろうまいよう 團々、わけと
政子甘の旨と

うからといてある 土持 土持といふたる 日々どんか中にむしとはず
も東京より不縁となつても 人を助ける身となりたいと思ひ
政子甘の旨事情に働いたり

国に一つの事情の中も 心とはず 心たカレンで来る 廿何の土どふいふ
信者は比白

事にあるともあんぼうの却能にあるともわからん 一つの心に成て是
をしつかり心配せに配すればさうはあむ心配はあんまりよいものや
さしつはあつての

おむでう小せしつかり聞き分けいつものさしづといつもの話も同じ事

さあ〜〜もうよいか〜〜
甘の口を連々と作る事と得心したか不服あら不服と

いよいよ水道かはりてから何にもあらんぞ

明治三十一年四月二十六日

村田慶光定日カ當り少きに付いまの間に林由松道のため
布教に出て徳つみかよ収たくとせむ常の心得につぎ出ると
申し長し昔の方へといふ処いり〜申上願

甘の口二段 一どの理 二度の理 三度の理
甘の口二段と 月日の社甘の口二段と 本部員同は

甘の口二段 分け表手口しまるも一人 裏口しまるも一人 内らの中しまるも一人
天理信者の中 月日の社甘の口

は三種とぶつて 道の中や 信者が のかあるこの
三つの理 しまるのは より来るどう 理き、わけより来る処に

甘の口二段

かど口しまりも中のしまりも 裏のしまりもこの理とりあがひかい
信者同は

様何か聞き分けい 心得まべさとす 才分の理にさとすによつて
ゆけ先の 信者が

よう聞き分けい くれ 一時かこしいでうしと、ふむりにどうと云
本部員信者が 甘の口のそはへ出て来い運と 事は

へん 一時道の上から云へばどうやひまや〜と云ふ理はどうり
本部教会は

よう聞き分け三つの理さとしたる 心しいかり 聞き分けさせ〜
甘の口二段と 信者同はさしづの上から

明治三十三年三月十六日
山辺郡松内字内山の官本拂下はつろ五本
及地所共本部へ買入願

さあ〜〜尋ねる処〜〜何よの事も尋ねにや分らん何にほどの

ふ〜〜理がうつる〜とほく 処か心こい 心はこびよつてくれにやあ
月日の社甘の口と云ふ 本部はあはれ所に甘の口二と信者の

月日の社甘ろの信者向の心と
らん又一つ大それたは
はうけとれん大それたしては
たすけ一条か

月日思惑の甘ろ

甘ろの三飯

人にもあらん
一つつんだやれたのもしや

月日の社甘ろの三飯
甘ろの三飯はこせても月日の社

甘ろの三飯は

三つ一つ
三だん一つこせんやよう
聞き付けて早くで年限

天然
ヒ出て来る
月日のさしつ
信者向の心に
神のさしつを

せいしんを定めて神の思惑の甘ろ
信者向の心に
信者の心に大それた
神は月日の社甘ろ名

いいてか
大それたうけとれん
三だん一つ

信者の心に
月日の社はさしつの中
から出たもの

の理がうけとれん
どこから見ても
さしつとゆふ又
見ぐるしいとゆ

部ノ道は
人問心の支配の本

ふ理は人に受けとり
あつても天然
うけとれん
こ小聞き
ふけたち

本一条は
十分は
こんや
いそいで
買ひてくれ
この理天然
ありた

甘ろの三飯
つたる
あの方木
何ほどの
へんをもつて
どうしようと
思ふて
わやけ

金を買ふことは

明治三年から

甘ろの三飯

ヒ出て来る

あんだもの
古い事情に
さとしたる
ちゆんじよふと
ゆふ

急いで買ひて
るがよい

明治三十年一月十三日
(旧正月二十日)

即教祖お話

続きてゆふ様
我々身の内は
義和はりま
したか
教祖様の
御身の上
を心配
付ます
さあとき
時は如何
ある内
利益を
下さ
いませうか

信者向の心に

真実の道

の道

さあ
安買がある
や
安買と
へは
しり
うまい
真安買と

甘ろの三飯
三飯がある

いふは
火水風

押す願

月日の社甘ろの三飯

信者向の心に

甘ろの三飯

さあ
安買を
買ふの
や
安買を
買ふの
や
安買を
買ふの
や

101

明治三十四年五月二十五日
本席 身上 願

おがく元治元年、この三十八年現場カワシムに以前九月より信者はよりか、リオオ方一つ道より

かりやく信降 伴花様かりやはたいもうであつた一寸しあつた比百カしてしま

うた大工いとり信者はにあつた事思ひて見よく一方神が手を打つた

事あるく一方の神が手を打つたをいひてあるそれより又一つくあちらか

らこちらからたん信者がよってありて来たる道あいだは九年とゆふ

九年の木のつじむくらしきとゆふその日の心一日の日たれもて来る者

わおかつたたよりにおる者おかつた九年のあいたもゆふむのは大工が本席

出て何む萬事とりしまりてようくついでく水たよろこんだ日

あるこの理は、水はつておかるかほつておけるかそれより萬事まかせる

と云ふれる、水が分らんか

明治四十年年二月四日(日)四月二十四日、百白さしづ一七一頁

甘菜踏台の方は四方正南といふ事さかして戴いておきますが此の上段の間は人間で分りませんからいふ事にありますか御願ひ

もう儼然家建といふ口を出したる一つ真は人の甘菜踏台を建てるのは動かす事出来んあとい

ふ事にして後の必きまつた建家また将来の図面引く事も出来

ん又話しも出来ん一つたてかたちかうによつて身限があるからこれまだくいかん

ヤクトにはいかんそれは一ツ理に先むくによつてとらんほかよびあよ

とむとらんほうがい

現場の普請

今改めただけどうでもやらにやあらんどらでもできる何にも心配

いらん心配は一つむいらん

甘原路台三下りの三

同日の社甘原路一つに信者一同と集りて理の本番普請は本部の

二 不思議な普請請であるからにうちのまにはあらんでな

おかげら歌ハ下り目

一 たくさんか道の 国々の中に 石の様かたい人たり木の様か心のまつすべふ人は

廣い世界や國中に 石も立木もおいかいな

甘原台建設の本

二 不思議な普請請をするおれどたれにたのみはわけんやふ

道の者が

三 皆だんくとせ界から寄り来た事あら出来てくる

今ま徳世身は徳心をたいて 甘原路一つに心定めつりて来い

四 徳心の心を打ち忘れ もくと心を定めかけ

本部のうしろかか理の本番建設の本番普請は

五 いつまも見あわせいたるとむうわかりするのやおいほどに

月日徳意が分る本本部のつとめさしづを聞いていふ道の事を

六 むしやうやたらにせきこむか むぬのうわきりしあんせよ

さしづせきりて

甘原台建設の本

七 おにかんか 澄んだあり 早く 普請請にとりかけ

道の先の方んむかたの方へ神が 石の縁かたい心たち木の縁かますか心の者を

八 山の中へとりこんで 石も立木も見ておいた

九 此の木切らうかあか石と 鬼へど神のむねしだい

五数百年祭には信者の心がさしづの上から甘原路につりて

十 此の度一列に すみきりましたがむぬのうち

明治二十八年十一月十四日

御教祖様の御普請御許願

中教祖の中垂普請がしきしてもらいたいよ

さあ〜 三斗収る 必〜 あ事情さ〜 二水〜 よう聞き方

天啓切心より三斗収ると思ふも月日の社甘の旨とせよ

けもうこのイ年祭〜 十年祭とおもふも一つの理 おもわたりあ

中教祖がたへた月日の社甘の旨とせよ

もうまいよう聞き方 元と〜 二水〜 元の並目請てけんど

甘の旨事情一箇二箇やさしづの上から信者さ

ふいふものこ水が世田村の大道や〜 見だて〜 せいじんしたり

二箇事情月日の社甘の旨とせよ天理の世の親か出て来る信者同は

ごんか処から どういふ事 出来ぬやらしれやせん なたもわからせん

甘の旨一箇二箇三箇やさしづの上からしんや 神の

もう十分ことむせいじんしたから思ふ様にある せいじんあか休下

信者の心だ 甘の旨一箇二箇の道が信者の心だ

思安おといの理やが村たりどうもわからん 処々ある程の理おさ

三箇月日の社甘の旨も

まりたり一時にふる あらんとものわん親といふ子供といふこと

道の

道の親

さしづの上から

月日の社甘の旨とせよ

も十分さして 親がたのしむ子がせいじんして おやがたいせつ

トかいて

道が出来る一般き果の理を取て

神の思惑心か

たのしみ〜 といふ せいよふ おさまりの理 十分の事か〜 とき

甘の旨一箇二箇とせよ理のかりや普請は日々さしづの理によつて始めている神は其

におさまる かりや〜 日々理に

一箇二箇を

しれともおはん又しおんとも

道の

どうしてかうしてふ見くとむいはん おもはせんぞ せかいことむせ

それは

月日の社甘の旨とせよ

いじんをまちかぬる あんじむあさいつのまにかつたといふやうにある

本邦信者同の

甘の旨とせよ

内々の必 どうでもわかうやも 地所あつめかけたる 必たい〜 とも

月日の社甘の旨を教祖存命當時同

うざしの必 じきにあつめさしてしまふ〜 又一つ皆お存命のたぢや

様にさあつたかいてして甲か収はあらん

教祖

のま、日々ありをつけてある 必 存命もおおじ事やで又

内々本部員働らきける者たけかりや〜たてかけるがよいゆるし

おくで
お筆先十三号

四一 今日まはじんふ悪事と云ひたして吾が身にしたりた者はあるまい

四二 此の心眞実神が去て浦が皆一列は思案ホして〜礼

四三 世界中一列は皆兄弟や他人と去るは更においぬや

四四 此の元も知りたる者はあいのでか先水が月日の疎念はかりや

四五 高山に暮るしく居るも谷底に暮るして居るも同じたましい

四六 先水よりむせん〜甘んじ事道具は皆月日よりかしものあるを

四七 先水知らず皆人間の心やはふんと高底あると思たり

四八 月日は此の首実を世田中へどうせしかり兼知させたい

四九 之れさいがたしかに兼知したければ自らが恐るい者にあつとせし心根はきよてしまふに

五〇 月日より眞実思ふ高山のた〜かいさいがおさまりたあり

五一 此の志をどししたおらば月日の社甘んじとせふおさまらふよいきつとめにたたることあら

五二 此の心たれがたしとは思ふかよ月日の心体かりあるや

五三 此の甘んじ事勤め高山にはむつかしい神がしいかり引き受けをする

五四 此の度はじんふ事やも眞実にたしかうけやいはたらしきとする

五五 神が出し世異中をばたけはばどんか勤めもこのみちいせや
信者同は 本郷が神の恩感をもついで道の
 じかときげ 高山とい谷感をもま、しら小た事であれども

五六 昭和三十二年 甘名台に入りてんが道の中に 本郷が信者を
 小からは月日わわりに出る程にま、にしよあらま水はしてみよ

五七 本郷の道と甘名台事情とは 昭和三十二年
 今道とあにかもんくがあかうであ、之れから先は神のま、や下

五八 甘名台に 月日よりあまくだりたるこ、わけかおんの事やらた水もしりま、い
甘名台一帯の道と さしがせもつて向かけにゆくのを

五九 たいりちはりうけつくろをたまけたさ、こゑ一糸おしへたいから
向心がけやむ 先方が困りてこれると 向かけに行く者の

六〇 こゑでもおど、うまえきくと 思ふからんを神がうけとりたから
明治四十年 の恩感と 本郷 甘名台一帯事情を

六一 今道は真実神が古てあれど、うちからしても、うたがふばかり
昭和三十二年 月日は甘名台に入りてんが

六二 此の度は何をたのむうたが、いふ水うたが、は月日しりま、い
昭和三十二年 月日は甘名台に入りてんが

六三 此の事はあんど、ほどあつておく、之れうたが、はまことこふかい
信者同は 昭和三十二年ト

六四 月日より一度あらおいた事、うつにありておちか、うことあし
本郷が の恩感と

六五 月日は第一、水が残念なふんや、わ、水をし、か、ち、あ、あ、あ
信者同は 昭和三十二年ト

六六 之れからは月日、水、事、向、に、ど、も、ま、む、か、ん、様、に、神、に、も、た、水、よ
昭和三十二年 昭和三十二年

六七 したるあり神の方にも真実にたしかひき、うけ働らき、を、す、る
信者の 昭和三十二年

六八 月日には、こ、ら、ほ、ど、い、く、の、あ、ら、い、し、ま、あ、い、ま、く、に、い、り、や、く
昭和三十二年 昭和三十二年

六九 七〇 昭和三十二年 昭和三十二年

七一 眞實に心に誠あるあらばどんか助けむちごうことあし

明治三十三年十月二十六日
高井の収田十一才身上御願

さあ〜尋ねる処〜身上たへられん事情〜さあ

かある事と云い思ふさあ〜内々さほい処へでこしてゐる中に

本部長（神の）やあ日思惑の人の甘の言は誠であるか
かりたるやうこれだんじむにわ〜だんじむだいがあろう

月日の言として
まいさだめるにわ〜さだめるだいがあろうまい何よの事

二段三段と〜
たてやいにはいがか事どうゆふ事、たてあいによいとゆふ事そり

やあいたてやい程つらい事あつまい内々一時身にさわるおれど

甘の言事情にかんけいがあいから身上たあつても自方の事情は
とほい処内々事情
あらうまいたてやいと

ふたら一軒下の事情やあいな一軒下の事情とりてき、あが

しは〜せんやらう
しよ〜うまいき、あかしあろ、うまい

明治三十一年七月十四日夜
昨朝御本席御身上御願申上は夜深かに
尋ね出よとの仰せに付願

こぼらくして

さあ〜〜もう一殺身〜さあもう一殺身さあちらの

はあし〜こちらの話しみあたいいつたへたこれより
信者の者が

と思ふ日日の社甘の言
本部とあつた道がある
未あかうした
中、これにはどういふものであ

信者へ向はさしづの上から
あはれ 甘ろの二三 話しあひてく水 順序の道つたふてく水 甘ろの事情は こはは

うおふはあしであつたか有りて知つて居る者は知つて居るだけ 信者へ向はさしづの上から

知らん者に聞かしてやつてく水 甘ろの二三 ことだけや 神の恩恵 年限のあとにはかう

いふ事 甘ろの事情 があつたとしらしめてやつてく水 知らん者は無理はあいて 甘ろの二三

むつかしい事 甘ろの二三 どのやあ 甘ろの二三 何年 甘ろの二三 あと 甘ろの二三 わしは 甘ろの二三 こまではしつて居る

是れから 甘ろの二三 あとは 甘ろの二三 知らん事は 甘ろの二三 順序 甘ろの二三 席 甘ろの二三 にたづねてく水

時々 甘ろの二三 の理 甘ろの二三 をむつて 甘ろの二三 順序 甘ろの二三 さとす 甘ろの二三 さとせば 甘ろの二三 わかる 甘ろの二三 こ水で 甘ろの二三 命 甘ろの二三 水 甘ろの二三 べ

とりま 甘ろの二三 とめて 甘ろの二三 く水 甘ろの二三 る 甘ろの二三 が 甘ろの二三 よい 甘ろの二三

おかげ 甘ろの二三 歌 甘ろの二三 五 甘ろの二三 下 甘ろの二三 リ 甘ろの二三 同 甘ろの二三

九 甘ろの二三 こ 甘ろの二三 は 甘ろの二三 此 甘ろの二三 の 甘ろの二三 世 甘ろの二三 の 甘ろの二三 元 甘ろの二三 の 甘ろの二三 地 甘ろの二三 場 甘ろの二三 珍 甘ろの二三 ら 甘ろの二三 し 甘ろの二三 必 甘ろの二三 が 甘ろの二三 現 甘ろの二三 小 甘ろの二三 た 甘ろの二三

どう 甘ろの二三 で 甘ろの二三 も 甘ろの二三 信 甘ろの二三 心 甘ろの二三 ま 甘ろの二三 る 甘ろの二三 ぶ 甘ろの二三 ら 甘ろの二三 は 甘ろの二三 か 甘ろの二三 う 甘ろの二三 を 甘ろの二三 結 甘ろの二三 ば 甘ろの二三 や 甘ろの二三 あ 甘ろの二三 い 甘ろの二三 か 甘ろの二三 い 甘ろの二三 か 甘ろの二三

明治 甘ろの二三 四 甘ろの二三 十 甘ろの二三 年 甘ろの二三 五 甘ろの二三 月 甘ろの二三 十 甘ろの二三 三 甘ろの二三 日 甘ろの二三 (甘ろの二三 旧 甘ろの二三 四 甘ろの二三 月 甘ろの二三 二 甘ろの二三 日) 甘ろの二三 百 甘ろの二三 日 甘ろの二三 さ 甘ろの二三 し 甘ろの二三 ぐ 甘ろの二三 一 甘ろの二三 二 甘ろの二三 三 甘ろの二三 頁 甘ろの二三

本席 甘ろの二三 様 甘ろの二三 身 甘ろの二三 上 甘ろの二三 御 甘ろの二三 障 甘ろの二三 り 甘ろの二三 候 甘ろの二三 に 甘ろの二三 激 甘ろの二三 と 甘ろの二三 相 甘ろの二三 成 甘ろの二三 候 甘ろの二三 故 甘ろの二三 教 甘ろの二三 長 甘ろの二三 様 甘ろの二三 始 甘ろの二三 り 甘ろの二三

さ 甘ろの二三 あ 甘ろの二三 く 甘ろの二三 今 甘ろの二三 度 甘ろの二三 の 甘ろの二三 普 甘ろの二三 請 甘ろの二三 じ 甘ろの二三 こ 甘ろの二三 か 甘ろの二三 ら 甘ろの二三 ど 甘ろの二三 う 甘ろの二三 し 甘ろの二三 ま 甘ろの二三 こ 甘ろの二三 よ 甘ろの二三 う 甘ろの二三 建 甘ろの二三 家 甘ろの二三 が 甘ろの二三 収 甘ろの二三 て 甘ろの二三 去 甘ろの二三 り 甘ろの二三 矣 甘ろの二三

ある 甘ろの二三 建 甘ろの二三 家 甘ろの二三 甘 甘ろの二三 断 甘ろの二三 台 甘ろの二三 を 甘ろの二三 つ 甘ろの二三 大 甘ろの二三 泉 甘ろの二三 と 甘ろの二三 して 甘ろの二三 か 甘ろの二三 り 甘ろの二三 だ 甘ろの二三 す 甘ろの二三 あ 甘ろの二三 ち 甘ろの二三 ら 甘ろの二三 こ 甘ろの二三 ち 甘ろの二三 り 甘ろの二三 建 甘ろの二三 物 甘ろの二三

お 甘ろの二三 は 甘ろの二三 建 甘ろの二三 物 甘ろの二三 ち 甘ろの二三 い 甘ろの二三 さい 甘ろの二三 建 甘ろの二三 物 甘ろの二三 と 甘ろの二三 り 甘ろの二三 の 甘ろの二三 け 甘ろの二三 こ 甘ろの二三 水 甘ろの二三 首 甘ろの二三 大 甘ろの二三 と 甘ろの二三 して 甘ろの二三 は 甘ろの二三 か 甘ろの二三 り 甘ろの二三 だ 甘ろの二三 す 甘ろの二三

今 甘ろの二三 晩 甘ろの二三 は 甘ろの二三 こ 甘ろの二三 の 甘ろの二三 話 甘ろの二三 し 甘ろの二三 さ 甘ろの二三 と 甘ろの二三 し 甘ろの二三 お 甘ろの二三 こ 甘ろの二三 の 甘ろの二三 よ 甘ろの二三 ほ 甘ろの二三 ど 甘ろの二三 席 甘ろの二三 も 甘ろの二三 つ 甘ろの二三 か 甘ろの二三 れ 甘ろの二三 て 甘ろの二三 居 甘ろの二三 る 甘ろの二三 によ 甘ろの二三

話はやめる 甘路台事情二段三箇と
つて又日々順序進ばさしやあらん 年限が長くなる
かむ未かいる、こ小だけちよ

と出しておく

明治三十二年四月十八日 午後十時

刻限おはあし

神一条の道は、こ水から始めかけ元一つの理いふは今の一時と思

ふあよ 生産未代つく大か道である本都が 甘路台といひてくどき

しづの上からくどき 甘路台二段二箇 つめたるさあ こ水 よりはすみやかか道からいんまに甘

路台を建てたやあらんたてにやあらんといふ道がいまにあるといふ

お筆先九号 月日が中教祖にありはんが 二 二水からはあにかよるづを 甘路台二段二箇 甘路台といひてくどき

明治八年

一三 之れまふむたいて話は説りたよとまた古りてあり直実のこ

一四 今日からはいのか様お事を古ふやらふ月日の心まことせまこみ

一五 日々にあにせまこむとゆふあらは か甘路台にありはんが道の表へ 月日といひ出る模様ばかりを

一六 此の話しいかり 信者二箇は 月日は 月日は 月日といひ出る模様ばかりを

一七 此の失の道のよふたいいかりと 本都の方へ 月日たのみや

一八 月日より飛び出た事を 本都の方へ 月日といひ出る模様ばかりを

一九 甘路台本都のある処をしいかりと 信者二箇は 月日は 甘路台 月日といひ出る模様ばかりを

二〇 之れさいがたしか定めておいたあらんか事でもなぶあきはあ

政子甘ろ台に不はんが表ド（かりさしづをまつて）理力高い甘ろ台の

二 月日よき飛び出る処（かよと）話 高い（かよと）いところへ

月日よき甘ろ台が表に出た

三 其の語 固りたるおらば一列はふんと月日はあらいものやと

道の

三三 世界申皆せんく（と）古のやある 其の白米小はむぬがは小る不

お筆先十七ワウ

昭和十一年

一 今迄はふんの道やら知れせんか（昭和十一年から月日の社人の甘ろ台の道と）今日から先は道（道）が分る不

人の甘ろ台

二 此の道はどうか事（道全体を甘ろ台一つにして行く道）に思ふかお甘ろ路台の一女木の事

人の甘ろ台

三 此の台をどう云ふ事に思ひている、小は日本の一の寶物や

天理

人の甘ろ台

四 之小をばか何と思ひし皆の者 此の元ふるを誰小も知らま、

月日の社人の甘ろ台とせ

五 此の度は此の元ふるを真実員にどうか世間へ皆教へたい

道の

人の甘ろ台 善兵三様の理 や叔祖の理

大 此の元はソかあぞ、とソカあみと身の内よりの本まん中一や

明治四十年四月十日（旧暦辛巳）

百回さしづ八十九頁

飯々と脚さとしを委受けまして 理の取り違ひより

家の人に心を越し事も真の心より悔悔申候

本人改業も示し奉承外又今後は何れも取極

さして載くと申 斥罪と申上

暫くし

道の世界へ出た月日の社甘ろ台を本都へ

さあ、もう一言 餘方人をあちらへ おさめると古小（は叔祖に）之小深き

いんぬん、さあ甘ろ台と云ふ理ふんと思ひて居る 其のあかり下輝

つてある此の世へ出た人間と云ふは何程の理と云ふやわからせんや、小を

さしづの上から 道の中の事は 甘ろ路台があるとおふ

よくつたへてやつて、小此の理おさまれば、何よの事む 氏白わかなる又々

甘ろいのは誰かがあるかや

信者の者は

二つ

ついでをもつて以てさとする 教祖子供中によく育つたけり、命の

秀司政子が

秀司の事か

秀司が學業に於いて一つの理

出来ん者あつたやろさあ、

を結ぶたぬ秘教を世傳つて中母堂現管長と案が出来

本部や

としよつて一つの理 結ぶたぬ せよより、いまだつたはつたる其の結

結構見せてある中山家の

長女政子

神が

構が見せてある 其の中に理の治らん者はほおりのやかたと殊

ほおりのやかた

三世の世の

人の甘ろい、この

しおいた咄し、こゝからとりもつて道とちふ 理 雛形見、あきらかに

政子甘ろい

一つの理 廿化 咲かしてやつてくゝ水

おかふら歌三下り目

一、ひりもつてよやしや、のつとめのばしよはよのものもとや

二、甘ろい事情つとめ場所は天竺自然ト出来てくる

三、不思議ふつとめ場所は誰れにたのみはかけぬいむ

甘ろい事情に道の世界の信者百と神が力を不て根の足跡と支配をさす

三、比白を 界が空なり 合へ 出来たり来るが之小不思議

月日の恩恵の最後の甘ろい所

四、ようよう、こゝまやつりて来た、家の助けは之からや

オカ

五、いつも火は水をしら水、珍らし助けをする 程に

六、おろが頼むはしてくゝ水か、竹助心とありて来い

七、おんでむ之小かり、竹助に神にもたれ、印す、ますする

八、病む程つらい、身はかい、私も之小からひのきしん

天理の道と今近信心したけいど、元の神甘ろい

九、あゝまて信心したけいど、元の神とは知らふんだ

月日不正社甘ろい

十、此の度現れた、家の神にはそついかい

明治三十三年三月十九日

中山秀司様まつ枝様三千年祭には新に社こしらへ合祀する事申願

さあ〜尋ねる事情〜尋ねる事情はさあ〜まあ

かみかのお水〜心だんじもつて事情ヨ穿ねるたつ収る処た

一時理はゆるさんであい今かりたして〜とこのへおや、めあれど

自刻限が来たら若い神として出て来る
先は若宮とゆふど〜うりであるがこい一寸はあすそこでかりたち、そ

こへ〜一時の処どうとわゆるしおく〜さき〜は若宮といふでこ

のど〜うりさとしおく今穿ねる処どちらやら〜こちやらやら分らん分

らん間今の必まかび〜どう様の事は〜どう様にゆ

秀司政子と新しい神として合祀してまつてゆくときがでくるべ〜
るしおく中にさとしよゆい〜やあけにやあらん〜どりたつ

て来るがこい一寸はあししておく

明治三十三年七月十四日 夜
昨朝由本席而身上而願建上は夜深かに気を出よとの仰言願

又こはらくして

本邦や明治三十五年より四十年迄の〜にさしつに先は若宮とさしつと

さあ〜元々十年の間とさあわかや、神とわ〜さいたやろそ

いは〜とんとすい事〜申す、分けにや分らん若き、神といひた

十年の間
若き、神とさしつ〜こい者〜順序の理

かあるや教祖存命中共に
おらぶ〜の
間
順序をさすは此の元だいと云は

自刻限が来りけりはあらはせんとせん

信者一同は

此のかんかんもよう聞き付けてくれにやあらん

明治三十三年十月五日

刻限のおはかし

一人はくはたまた一人ふせえだる理一本

うゑこんだる理月にはかほれはらん

甘の台ひかかた三段も

とむふこの一つ隔き合けてくれにやあらん

表に甘の台とむいて出て来た

どんかにはたりきするやれん

天理の道は本部

た芽どんか花咲くともしれん

甘の台三段であさまる三段は

兄弟とむふとうぶんの処

の花あちらへ一ばんこちうへ一ばん

筆にとりてくれ

明治三十三年十月五日

永尾屋のおさしづには押頼

有頼居合せし者止忠作嶋田忠三郎

正兵衛梅谷田即兵衛山中彦七平野

宮本森三郎清水咲之助

押入屋のおさしづの場所といふ処

昭和三年

七ヶ年の年限

其の間

一人一人

今場所といふ

一三五

場所とむふ事は

さあ

七ヶ年の年限

其の間

一人一人

今場所といふ

一三五

中教祖 （女政子事に天に） 政子安子と
本の根からいせこんだ種 二人子供芽がうきかけた

しばらくして本部員同墓の場所の事談不居るうち

ちがら〜まだわからんか〜もう七十年たつたろ〜うち一人 （昭和十年のうちに安子はまだ）

あと子供二人芽をふかしてある此の順序ふんぼさとしても分

らん一本の根あらこ先月かかはれど一日かかはらん〜さあ （中教祖とあ）

〜おんにも分らん先から道がつくりてある〜こ水も聞き分

甘る甘か （高山が） たいかへは （やある） 誰かがつくりたか子供二人 （比呂月日か作られたのである秀）

はこからや下花も咲けば笑むのら〜 （司政子は昭和十年）

おさとさんの尖やありますか

さあ〜道がつくりイあるによつしどちらへありと順序が不 （さしづの中） （本部のせとに甘る甘る〜） （の道）

さる〜

押してオオオ忍か函かの願 （甘る甘る〜）

さあ〜じゆん〜にぶつと〜まあ〜いまの処じゆん〜 （甘る甘る〜）

にぶつと〜 （お筆先四号）

大口 今日の日は何の珍らしめ （たまたま） 高島いんねん （の者は） 皆つりて来る （人の甘る甘る事情とあ）

六一 いんねん （の者は） おほくの人があつたにどこに （たまたま） だてはあるとおむのか （の者は）

六一 此の世を始めた神の事あらはせ （月日） 世界一列 （世の） 皆吾々が子あり

六三 一列の子供がかわいそ小故に月日かいかに心つくしたるあり

甘の台に道をつつして人を助けける事を早くおしへた

六四 此の子供おにも教へてはやくと神の心のせきこみを見よ

教祖の子供甘の台の

六五 だんくとして子供の出せまぢかぬる神の恩徳之小はかりあり

本都信者を甘の台の信者に

六六 子供へ早く表へ出したさうからを日本のおつたするあり

甘の台 月日恩徳を知らぬ信者を早く助けたりたいこ小せ

六七 眞実に子供の心しかとせよ神の心はせくばかりや

甘の台は神の心を受けつりて信者の者ぞ

六八 日々に神のせきこみ此のちやみ早く助けける様様にして小

本都は月日の社とふる人がおいかり信成に出くする月日の社甘の台を本都にたたら

六九 うちおるはかみと思ひいづみあるおみあいや神のうけやい

明治三十二年十月十六日 午前十一時心得

(西の定どくお説きあり)

月日入正め社甘の台

根にはおれさんだらどの様か細い山さかからでもとの様にさかへるとも

山さ

分らんしばらく細い道から通り心一つの理である程に日がまつ

いと心ゆる様か事あつては今といふたら今ややあいなまよやい

さしづにも

とちが事はまへにも知らしたる又ぞふいふ理がたてやふやらしれ

たましい

んでいかた因縁とはいひおがらう定まり事とはいひおがら昨日や

者

今日に思ひかけあい道のため先になした三人の子供に笑がのら

本都は

すで又一つ元からさびてさびきつてどうもほらん

三世の親秀司政子を信者同は

子供三人とだてばとだつとだてにやとだたんみおく心の理

甘の台をもちいおもちいんは心しだい

政子甘ろ台に不仕んか表に

甘ろ台殿ニ候べきしづの上から

二四 月日より現小出ると云ふたとして だんくおにむことけりたけへ

月日の社甘ろ台が表に出たり信者の書に身上が出るといふは

二五 此の度のおやみであるを 病やとおもっているのはこゝれはあがう不

二六 之ればかりと病ふぞとは思ひかよ月日自由用知らしさいりへ

月日の社甘ろ台がさしづの上から

神の心にふかい

二七 おにむかむどの様お事も知らするは 先の思ひあるからのこと

二八 此の話どう云ふ事であるならば 火の甘ろは月日ひきこうけ

たましいの因縁の甘ろいりか

二九 月日よりひきうけすると云ふのもふとの因縁あるからのこと

たましい

中教祖が天理の世の

る前と天に捧けた政子と云ふ道の

三〇 因縁むどう云ふ事があるからば 人間始り元の道具や

天に捧けた政子

三一 此の者に月日おろづのしこみするそしや珍らし助けするものや

神の思惑の甘ろ台の道の

三二 此の事はあよとの事やと思ふあよ之れは日本の古記あるぞや

明治三十六年五月二十九日

天理教別孤獨立請願書の件

月日の社甘ろ台と云ふ

さあ〜まあいり〜のはあし元がわからんから元を現はす

る元現らばせばみか〜こ水まやかんかんした理と云ふ〜心を

月日の社甘ろ台の中教祖の

甘ろ台一殿ニ候事情は

もついくれにやあらん子供の成人まつていたはどとよく〜

ぜん〜よりもさとしたるさあ〜すい〜本部教令に

さしづの上から

いつて来るが

よいどんか事も話して来るがよいかくしつ〜みはすつきりいらんか

明治三十二年三月三十一日(旧十月)夜

殿降きさゝと十日前より皆骨痛み相談の事情とも申上りて御願

政子甘ら台事情

政子甘ら台が出る道に甘ら台いおがた一二と

子供事情見分けてやれこの理 聞き分け色々代がかわれど

界わかれうまいほんにと古の理 世界親里と古の理が現れ水て又一

道にはふしがあつて本部はどうありこうあり不自由おしに通れる様上かつたのもよういたい

よう聞き分け今ふし古い順序一つどうありかうあり何不自由よ

ういたいいでなつてかうしてかうすれば思ひて見ればさびしいものや

今道はようく日を通り来た道のを界に甘ら台を古一つの理が現れた之水が道の

と思ふ今年はよぎなく日を通りしらぶ一つ理も現れる順

序一つ心給めて聞いて見よ教祖子供はんはぐり水た者年よ

つた者一人殊つた人思へやうくの目見てくれた者一つ

又はなししつかり尋ねる理に不自由おしどうにもわかにもそに

序一つ心給めて聞いて見よ教祖子供はんはぐり水た者年よ

つた者一人殊つた人思へやうくの目見てくれた者一つ

又はなししつかり尋ねる理に不自由おしどうにもわかにもそに

序一つ心給めて聞いて見よ教祖子供はんはぐり水た者年よ

つた者一人殊つた人思へやうくの目見てくれた者一つ

又はなししつかり尋ねる理に不自由おしどうにもわかにもそに

序一つ心給めて聞いて見よ教祖子供はんはぐり水た者年よ

つた者一人殊つた人思へやうくの目見てくれた者一つ

又はなししつかり尋ねる理に不自由おしどうにもわかにもそに

道の

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

明治八年

月日の社甘ろ台と古一四四

二九 今道にたい助けをばするからは 元を知らさん事においては

明治八年 信者が

月日の社甘ろ台と古

三〇 三ノまやも知らぬ事をばせしめるは 元ある親をたしかしりする

月日の社甘ろ台と古 信者二同が

三一 元あるの親をたしかしりたあらんか事でも皆ひきこつける

三二 此の語たよが去りとは思ふよ月日の心ばかりあるをや

明治二十一年九月三十日(旧八月十五日)午後七時

甘ろ台殿の殿三殿と

比白ふりうてはしめかけろでい はりでもわかろやろうさあ

神が

何い先い 一 たつた 一つのいりせをい

神の甘ろ台を意に

政子甘ろ台と古の世の

一 早こたしかけ 一 さあ 一 おやがとが有りたした

明治三十三年二月二日夜

前に同揃の頼出と申指図に付本部員
不殊打揃頼出おさしづ

こんばんじつをさだめてしまふ 何からさだめやう 一 さうがやあ

一 さあ 一 このやしきから定める 人間はじめた元のやしきこれ

天理の世の世の

月日の社甘ろ台の元へ信者き

中教祖が道

は日々さとしてゐる 又人間はしめ親里 一 比白つ水かへる

甘ろ台が二世の世を始めておさまりとある中甘ろ台が何らんよかやは

はじめ又しまい中かあとにふつてはどろむらん 順序定めてしまふ

古くより説いてきた教子安子を元にしやた

中山一家の

中教祖あつぎ

とささす 順序もとあるはあし 元ある 一 代あ

秀司政子甘ろ台主婦の 道が

この一々の元のやしきのためたてかはる 一 道つけるため秀司政子に

あか 一 もつて困難

せよしたこんかんとせしたはいふまやわからん 階はせんおむのせ

は道たるは神の道の中におは

政子安子昭々を承けたまはけるため天にさし伸たから

の道の中へ（出直）一人はくわいて

政子が甘方口である長くつたわつて来た

皆道のためかつしたのや（神の支配の道と）第一といふ

神の支配の道と

あかける人間（神の支配の道と）神の支配の道と

神の支配の道と

あらん（神の支配の道と）政子の道からいふ

政子の道からいふ

さあ〜（神の支配の道と）政子が第一といふ

神の支配の道と

は人を助けたは第一といふかきの理（神の支配の道と）こは第一

神の支配の道と

に助けは世負た人はまめ下居る助けは世負たけで思はしらん

神の支配の道と

政子のといふかくして助けは世負たい助けは世負たい

神の支配の道と

るかこはははかきにやあらん（神の支配の道と）このだれをい

神の支配の道と

〜といふ理は決してさとしんがよかろ〜さあ〜

神の支配の道と

け存の道理（神の支配の道と）かついふ道理しつさいの事

神の支配の道と

さあ〜（神の支配の道と）あり〜の出し〜

神の支配の道と

道は教祖が一代甘方口が二代甘方口が三代甘方口が

神の支配の道と

さつとだいは三代あとは今の事情四代といふ

神の支配の道と

一つの理子供（神の支配の道と）何人かんにも不自由あき者

神の支配の道と

のこんかん不自由ははさとしてくわにやあらん

神の支配の道と

またそのがため結構と憂へる子供と義理として

尚にのりてのこんばんだけ

ほんにかはいそうか目があったあんで

かむわ はんぜんさとさとにやあらんこの道竹助此の道理をさとさとにや

天理の道む

三飯甘ら台が

あらんむう代々かはりて一三四代目の様おもひのえ小すやの処た

本郷下道の

甘ら台一飯が出て来て又甘ら台ニ

つたあとくさきくさきくさき 比白お順席さとしてそ小からかうあつ

飯が出て来て三飯月日の社甘ら台の

てどうあつてしこか道といふあんでむかむさとさとにやあらんさうか

へくさとしませうく 世田からあんかあほはあいは白人と

やつてしめてめとどうするやいああといはれた日はあんぼ蘇した

明治三五年から

本席を

やらあらん三十五年あと九月十月以来道竹助杖はしらとして

本席の言は

元治元年より

道 理をばじめかけたどうやむよいと思イはあらんよう 濁き分け三

信者も

十年以来は日々庫ぶものもありてどうありこうありやうく

あつ極くがむいのか教祖は身をかくされたから

而教祖昇天より

おほくあつただけで比白あつたらんかあといふたはふしといふし

本席から糸と 而教祖百十一年の理が叩いてからは道の甲に甘ら台一三三と素直に

かりつ ぬが出たこ小からさきくさきくさきの処どんかふしがある

かある

月日の社甘ら台とあ道の

ともあらんあんほうふしがあつてもあんじる事はいらん杖はし

月日教祖より

さしがの中に 月日教祖に不りんか

月日の社甘ら台

じんたる杖はしらと思へば何も楽じる事はいらんこ小つさとし

本郷信者と

ておのほは分りかたあいやあく又つろこ小すやといふははたらき

おんにはけんはたりのきんにあはあはあらんはたらけばはたらく

だけつおだやわにかつたかあともあつただけわきもつてやりに

やあらんようこそといふことばのまんましくさくにかあらん比自ん

あつたあつたやあらん外あつたにたのしみもつてやりにやあら

ん肥するもおあじ事候つておいてはう急おがし修理せんも同

じ事とつた理にさとしおくかり比自んくよう同き、わけつ一時に

おつめてく小にやあらんく小オヤ年限異うをうのたのしみは皆

つけてあるたのしみの中のせむしみはめんく心の理かどみやしきから

道やあるが自日の社甘き口をもつていかぬは

月日の社甘き口と

今道道のために苦勞を働らいた者は

うち出す言葉は天の言葉下ある程に理をおそ小オあんあ事と

小あんあ事と思へばあんあ事にあるめんく身上もあんあ事にか

る程にくこのつた理をさとしおかこう

お筆先入号

九三 あにごとく月日いちどおられた事あがひそうふる事はあいなや

お筆先おさしづに神の恩恵が

九四 今道もあつた程に説いてあるあつた心に有りあけから

信者の

九五 しかと聞けおあじん同あつた様に思ひいけるのはこれがかちがら

月日入込み社甘き世の親甘き口

九六 どの様あ事も教へてわのちえある親であくはりかんか

月日教祖に入込み甘き口の如くに天理の道を

九七 今道もあつたを教へて来るのち皆この通り始めかけた

一五一

教祖が天理の世の親ニ世の世の

九八

人間を始め親がもいちんどこにあるからたづねろて見よ

九九

此の世のしらぬ事をばだんくとおろいし小どもエハが誠や

一〇〇

曰々に知らぬ事をやあり事をエハ教へるが月日たのしみ

一〇一

此の世の人間始め親あるに天のあたへはあると申けども

一〇二

此の話おだの事やらちよとしれん月日じきもつやろとゆふのや

一〇三

此のはおしとうゆふ事やありうから甘露の世に平鉢をのせ

一〇四

此の先はあちこうちに身にさわり月日いりをするとおもへよ

一〇五

来るから吾が身さわりとしぬあめせおあじ事から早くそうじを

一五二

一〇六

そりじした処を歩きあちよまり其の処よを甘露の世

一〇七

したるあらえれよりとゆふ事をあひはやくかへはよころいせむで

一〇八

エハはかりこいたづねもあい程にエハ日本の真の柱や

一〇九

エハさかたしか見え来た事からばいふ者むおおる者あし

一一〇

あにたふむ真実なるのしよシカ見え一人事にはあとの様子を

一一一

どの様か高し処の者やとて自由用自在に話するあり

明治三十三年四月三日

飯降まきゝ愈々しくせふかの骨痛みに付願

けい

けいいつのさとしは代やぶいつく何代の理又取次理にさすとす

一五三

神の言葉を教祖の理

のあとつが

とへ

中教祖百十五才の理の切し目より千四年目と云ふ、其の道は

人を導く

とゆく信者の心

の理にさすとす、年限理かりさとしたりまんご末代といふ又取

り次にわとりおさめ、第一二代三代、何代やむ同じ事

中教祖百十五才が

にある何事も本部は

道の、の甘ろ台事情が

甘ろ台三三と

一代の理

信者同は

信者は甘ろ台一三三と神が

さしづの上から、月日の社甘ろ台から

わかる順序

いろく申

とほりぬけ

とはしたる理

ヨ等ぬる、理さ

お理

人間心とはさらり、おもは小ようまい又おもはしよまい

神の台と云ふ甘ろ台は信者と

席といふたり、同じ人間である

かれど席にたつてさすとすは

天よりのさとしである

この事か、うのか、か、わんはとりつぎにある

甘ろ台二段三段と

ある教祖の

かたちの上からは甘ろ台事情は

月日の社

教祖からの順序の道

一つの道、ま、い、り、う、ら、一つの理をもつて

甘ろ台と云ふ中教祖と月日の社甘ろ台と

この理二つは一つの理

中教祖百十五才と云ふ理、かりよいが教

祖の理が切し目たり助けがよりおいから

かつたり、と、う、下、あ、ろ、う、か、う、で、あ、ろ、う、お、も、ふ、事、イ、す、つ、き、り、ま、ち

か、う、て、あ、る、か、ぶ、た、あ、つ、し、い、つ

か、う、で、あ、ろ、う、お、も、ふ、事、イ、す、つ、き、り、ま、ち、月日の社甘ろ台と云ふ

名、人、の、心、が、あ、る、心、の、と、な、へ、お、こ、お、い、は、ど、う、も、あ、ら、ん、今、日、の、日、わ

から、あ、ん、だ、日、々、だ、ん、一、身、の、ゆ、り、は、み、だ、ん

一、身、の、ゆ、り、は、み、だ、ん、一、身、の、ゆ、り、は、み、だ、ん、順、序、か、ぞ、へ

こんでみよ、人間心でしているやうさらり、おもわりよ、まい、もう、席

いせ、こんだ、理、は、だ、い、に、あ、る、か、か、け、し、ま、う、て、は、ど、う、も、あ、ら、ん

あ、ん、じ、る、事、さ、ら、に、い、ら、ん、親、の、あ、と、は、子、や、あ、る、親、に、子、が、あ、け、ね、ば

甘の台事情一三三の

神の 女政十年の人を助けるため義経と

今生

志も程大にせしやからん道

見と云ふは 使ふて

あくる日

今生に甘の台三段三棟の表木工と 女政十年に政子は引とり本に

ま心紙に包んがおせして置て又 使ふものもある ぼつて置て

三般月日の社甘の台に

（今生） 出して 使ふ道 見もある こみかけ一寸神が話しておく

お筆先十一号

五八 月日よまどんお事やお見いするで何せおても皆茶知せよ

政子が来よる

五九 今年かりしおじうねんはふりくと 病まよわらふ春まわとあり

六〇 女水よまのためしみあるはあるまおこふをまおとたためいよ

六一 月日には今まどいにおい事をばかりおれやソ茶知してきけ

六二 この様おの事ばかりおしけよと先をえんといふお紙や

六三 おにぶんに珍らし事をすまからはいかか話おおい事はかり

六四 どの様おのい事はかりおれたとて先を見い居よ 見いと思議や

五教百年終直は

百年祭

六五 今あるのふやみているはつらけよとこよから先は心たのしみ

月日の社甘の台とあ

ついで道の

六六 此の様お話くどく けいのおもお之は未代お託あるのや

政子と入りはんで表に

さしづの上から

六七 月日より此の度こで現れとどんお事を話するの

さしづの上から月日の社甘の台建設と甘の台一殿二殿や 神の思慮の道の

六八 どの様おことおだんくおいらしたら日本の古託みおこしらへる

明治三十二年六月二十七日

第二回今昔話中の建物せんく制限してお前を附けると被仰は右は誰の名前とて宣敷哉

さあ〜 尋ねてくれば 処尋ねにやあらん 刻限でさとしたい
お小ど日々おろくにみかおろしたる あちりこちり身のさはり

から尋ねる尋ねたら〜 理をさとしたる さしぐや 女はせいぐ水

政子甘の台 結構にからんでおる 信者同は 聞

き方けけふ不自由らしさをもいひてつれてわどりたものやあ

いあんぞく〜 暮れしそいそといひてつれてわどりた 三十一年から三十二年 何ヶ年以前から

はんぞんからん中からつれてわどりたものや 信者同は つれてわどりてからの

おんぞく 政子の 苦勞見合けたら 命るやあ 此の道理 聞き合けてやれ

聞き合けてやらにやあらん

押してまさご忠のむ前に致しませう哉

おき忍さんの物前ト 政子の物前ト

本席も政子甘の台から

さあ〜 どうして〜 水かろし〜 水之小は 席からいばさん道理

さしぐにしろしあは

政子甘の台ト

政子甘の台ト

にある道理より 運ばにやあらん 本席の子供まさご忠やはあいは教祖の子供政子である かん

かむかい道の理からす小は 軽い者やあなまい

明治二十七年三月四日 夜刻限

此日四時頃より本席様逆痛一本俵に逆痛

年限身うおうにたつて出て来る道がある 甘の台と女のは

年限さうおうの道である 心から 心からまゐりて来る こ小から

ほこりのやめた政子

本席があるのにむか屋がおちばやあん

あんお者あ あんお 処あ

あほらしいとつた者

三々世界を助けしゆく 月日が
が国の真体しりとある 不りんや去まうから 長あかへるけり
今出て来るから真実の心をもちて
いへば今日じつの心とんが事も同じなけり

しばらくして

神の思惑の甘ら台事情や

さあー なんとまあい様からかんでまおい此の道 始めのけり皆

遠い様に思ひたやうー づんできたら其の道が見忍かける

さしづの上から甘ら台建設と長い事は

やあうー 心におおままりいてゐるやあうー よう聞いてくれにやあらん

甘ら台事情の道

あよつと 始めかけた時どちりへへこむかこちらへへ不こむか不り

甘ら台二殿 月日

こむものはたくさんあつたなほでもどうも一人の心に一つの理をむすび

甘ら台が出るまで長い間
あんだ長い間から 聞いて居る者もあるう 筆先にも出して 元々の

そ天にさへた其の教祖の心が神にかつたといふ 子供の内より教祖と共に苦学した政子をお道

咄と聞いてある 程の理と 思ひたけのむらいつけた

の中に月日が 又政子年教祖政子安子と天に

親子諸共 伏せ込んだ理 人間心 人間の思惑心

月日思惑の道と通るから人間には

にはあううま 誰かに忍んりよ気がぬはあいもう伏せ込んだ理より

月日が伏せ込んだ政子さしづの上

よつと思安ホして 心得ちがひのなきやう 取りもちがひのあき様

政子甘ら台事情を皆の心に

やう事情 おさめいくくるやう

明治三十五年六月十四日

中山會會長市歴代市歴代参拜の爲而出向願

さあー 先はまあ せんー の道を通んか 心あけりやあうまい

甘ら台二殿 二殿

月日社甘ら台と長いことか

一六三

本部から

本部信者一同が

運がと長い事は神が其の心を

之小はとめるやないつとす事情であるから受け取る処といふ

月日の社甘ろの心をたまに甘ろの飯を信者が

月日の社甘ろの心が出て来る

地所をのみあらしてかよい道ありの道をつけては処といふ

月日の社甘ろの心は世の理の

せんありいつかりふしんにかゝるいつとありたら出来るぞいおあ

信者の心を

神は

とてふおれぞほんに之小のいおあといふ事情におよめるおれ受取

心で月日の社甘ろの事情をききつて

るしきつた事情は受取らんこいよう聞いてくおねはあらん

お筆先士三号

四四 今道に筆につけたることはりがよあ見へて来た心りさむむ

月日の社甘ろの心

信者

四五 之いさいが見へ来たあらば一列はどんか者でもよひきづくめや

月日の恩恵を

信者

四六 此の心どうも早く一列は是非知してくお月日たのみや

明治二十五年二月十七日(即ち二月十七日)夜
永尾よし(身上)今一飯すかやいあらぬ故願

よし念さんの身上は

さあ~~~~~ヨサ収る~~~~~たづねにやなるうまい~~~~~だん~~~~~

の上から話して来た甘ろの飯はさしづに右ひてあつた

比白が身上頼やたづねた

いさしづ~~~~~之小までさしづ~~~~~の事情~~~~~いおあるさしづ

は甘ろの建設のさしづであるから本部の道と甘ろの事情の道と

かはる~~~~~みのこうちあちらへかほる~~~~~もうこい下しつかりイ合と思

三飯月日の社甘ろの心

甘ろの心

天然自然に出来て来る甘ろの心

甘ろの事情

へど又かはる~~~~~いおある事情きわけなる事情きわけいつもの

さしづの上かりさとしている事を

甘ろの心

を思はんよう

たまには甘ろの心をたいあけてゆか

さしづおあじ事とさくら~~~~~事上甘ろ一人心得の

ねはあらんと心得一行かねばあらん三飯

事情の理をさといふつかしさとりやあ

三飯月日の社甘ろの心を神が事情ゆるして始めますから

せしたらいと思ふやろ

第一ゆるし出す処からみか~~~~~心を定めしこいさくさくだめさ

しづの理にまちがう理はあかまじじつ三般甘ろの事情は真実の道であらう一時心に信者の

さだめしこれにやあらん本都のまや通りのは今一時といふはオホよし急の身上頼にさとした甘ろ台やせんの事情は

三つ一つの事情をせろへてさすとすといふた処たりさしづ通りに出してくる年々出してくる教祖ト

の理三つよせての事情百もおくれはからんてあるよく聞き分け萬人一人せ助けは甘ろりて

たまけ一糸の理をさつしてく水月日思惑の甘ろ台あにくの事情が本ニシとあふの事情見信者の者は

て見のかし聞いて聞きのかし甘ろの事情がらさしづをまつてさしづ通りにたたと一つの事情もある

神の思惑の甘ろ台を皆の心甘ろの事情を一つけつしんだめい甘ろの事情をく水三つたすののさしづしよ

うはやく事情きとつてし水神の真実じつ三つして甘ろのニシとの心わからうまいこれた

三つ一つの事情さすかりにはさしづの理にむたれてくれにやあらん教祖がつけられた道は古き道である教祖一家

面々分け一話あいせにやあらうたましいんぬんの甘ろ台事情一般一般で制限がさしづの上からまじむ甘ろ台一糸とあふ

ふるや事情たんいおがたとあふく制限をもつてしよかふく教祖の子供を道のを界の谷底に生れさせし始める甘ろ台ニシのらしたる道といへば甘ろ台一糸とあふ大きい道む

あいはほいおがたとあふい道もある身甘ろ台ニ般の事情はいおがたとあふからいおがたとのところよかふく事情三つ信者の者は一つの事

情はやく聞きとつてく水事情理信者万人と甘ろ台とむかひによつて見の旬制限が来て政子甘ろ台事がす事情はつてお

く事なあり信者万人と甘ろ台とむかひう萬人一人の事情旬制限が来て政子甘ろ台事どうであらうと思ふ思ふやろまあ一時

はあし信者の者はかけた信者の者は処とりむつてく水信者の者はにやあらんとりむつ理がうけとる

三つ一つの事情甘ろ台ニシともあんでむかひむいそぐやあ事情甘ろ台ニシと

おしり

さあ〜〜一時々としたる三つ一つの事情が急ぐといふ三つ一つ
にしてゆく事は甘ろ台一殿二殿の
事情は悉く〜事情をもつてさとするらんやわりのわは
する甘ろ台

おし一糸の理をたしてやあらん甘ろ台一殿あららへこちらへ事情おしくし
日をおくりたる本都かしん者は百年祭から二世の世を始める政子甘ろ台事情へとこあらす日の事情はこぼれやあらん
明治三十四年一月
刻限

さあ〜甘ろ台一殿がた一殿事情やわりの事情のつとめのあららへも甘ろ台一殿がた二殿やわ
あらさんじやいなあ此の時鼓耳聞くさあ道具がうるほうさ
とていついある内に月日の社甘ろ台が天啓をもつて出た道の火きうじが始まつた

にそりきんすかまやすつかりはあ〜さうじぶきさうじさあ〜

本部分教會そうじにかゝる本部分教會そうじ出来たら支

教會出張所火きうじ〜さあ〜道の世界はゆふまやわかく

道の信者が理の上からあらる甘ろ台一殿二殿と出る道の中に甘ろ台事情とよふものがあいの
死人の山がつく雨かせ大地震海あき処に海がやき火の
に甘ろ台一殿が出来た甘ろ台二殿が出来たに三殿が出来た本都
あき処に火が見える水あき処に水が出る

あく〜日様月様の理らん火に水が切れるさあ〜信者一同はあんにもお先止はらん
あつて神の支配とあるとあふ事は神の恩恵の甘ろ台事情は

神一糸は一通りはとききかせておく大海に浮ぶ船の如し
甘ろ台三殿も甘ろ台一殿も出来た甘ろ台三殿も出来た三つは本都におくまる本都を前のまか
南に行けば北にむどり東にむけば西にむどりどうか助けたい

甘の台事情をやめれば本都は
と恩のいかりをおろせば、うづもれい、かん風にまかせてやつ
てしまふよりほかはないほどに

本部員おしへ願

さあ〜さとしおかにやふらん、もう年限と去ふ年限わすか

にのうてある、一日の目を知らず〜の目がまたら世界大そ

うじの日やで先水より安樂とゆふ日も年限しらす三千

六年まで、あと二年やう〜さあ〜しつかり安神事情

先水より九年までば、枝先かり、同神が力を流し根の兒

姉に支配をさすさあ〜にち〜神のさづけとゆふは月日

の光りさ、するやうににおさめいく水ねはあらんさあ〜事

情、おさめいく水るやう〜さとしおこら〜神とゆふは天

理とゆふ生座末代とゆふを天よりおさめ、めにやあらんさあ〜

事情〜しつかり事情やでさとしおこら〜

今まやばあにをゆひも見へ〜むう此のたびはせへつつか来た

六〇、こいからは陽気なつとめにもまたかゝるふんの事やらあよとにしまい

七一、いままも知りてはおしへはおせども、説りてあよとむあんの事やら

一七〇

に道の

月日の社甘の台

信者向の心

つづく甘の台、道の中

お筆先

神の恩感

昭和十年からは

本部甘の台、殿、殿、さしげの上

一七一

昭和十年

神の恩恵のさしぐさ

月日の社甘ろ口が出て来る

一七二

六二

之小まはほりかか話を説いたとして曰が来るんを見へておいせや

三做月日の社甘ろ口

神の自由用が

六三

之小かりはもうせへつうが来るからゆへは其のまゝ見へて来るせや

政子甘ろ口三十方オ二年あと百年祭

信者百の

六四

去かこ聞けさんわくだこの蒙合にむねの掃除を神がするやわ

本部は始まりはまんやした道であるが人同心や通つていりからだん

六五

思ふ案せよふんぼ社人だる沢やといどろをいれたらだごる事あり

本部の中を

月日の社政子甘ろ口

六六

どごり水厚くすまさん事には真の柱の入り様があい

政子甘ろ口

天理の道が

六七

様やい早くふたる事ありは末代志のとおと、中りかつく

本部に

明治四十年四月十日午後五時五分(旧三月二十一日)

御とのおとしをま受けまして理の取りちがひより遊に人を

怒み然し事も真の心より懺悔申候本人故徳も之に

着り居候之今後は如何なる精神も取極めさとい敷と申居候と

申上

甘ろ口一段が千年たつたらニ段が出たニ段五年たつたら政台三十方オ七オ八オと

何年たつたらどう幾年たつたらとふまだく、六七、七八年まだ

多教百年祭から甘ろ口一祭生産未代の道と

あるまだせ小から先かかひ道といふたる之小をよふ聞き方

甘ろ口一段ニ段ニ段を信者百の心と

けいこ小にやあらんニ軒ニ棟を一つの心と紹めるから此の

心たかしんかくれ一言押し話にたへておこり

お筆先九号

明治八年

四二 どの様か事をいふ今何の事何をいふとは更に思ひか

四三 だんくとおにの話をするにもお先ある事をばかりいっておく

四四 之れからはおにの話をするからは甘ろ口台の話ニ条

本部でたてた

四五 今あるの甘ろ口と去ふのはおちよとのひかがたまごの事や不

一七三

四六 之れからはだんくしいと云いながら甘路台のむようばかりを

教祖の子供政子を五ヶ年あかせ

三ヶ六オに甘路台のせよ

四七 此のいをも少しほり込めさしわたり 三尺にして六角トせよ

又生れさし

三ヶ六オの政子甘路台を道の中へ

四八 今もやどりか 話といたるは此の台すゑるもよふばかりで

四九 之れさうがしいかりすゑておいたからおにもこのみもあぶかぎもおい

政子甘路台事情を始めのかり

五〇 月日よりさしづばかりをした事を之れとめたから吾が身とまるや

三ヶ六オの甘路台

信者の者は思ひてん

五一 之れを見い識真実結構と之れは月日の教へるぞや

三ヶ六オの甘路

五二 此の台が出来たち次第勤めするどんか事でもかあわんをかし

三ヶ六オの甘路台をいつ建てよと信者に

自刺限が来い

甘路台の

五三 此の台もいつぞうせへと印はんでお出来たちたあらうつとめするぞや

甘路台一条の

五四 之れさうがつとめたかり出たあらはあにかあわんとゆふをあいせや

三ヶ六オの甘路台

より甘路台事情が大きくある

五五 之れを見よたしかに月日ぢまものあたへしいかりたしかわたする

甘路台ニミと出た来いも餘の甘路台にはさしづ自由用天啓自由用身と自由用とを

五六 どの様か事でもたしか真実のしよふこあけぬばあやうさういこと

五七 之れからはどの様か事もだんくとおまかしく説く之れにせむか

五八 この話おにせむかやと田んふかよ甘路台の模 様 一 条

人の甘路台を二段ニ段ニ段

三段甘路台が表に出る年限は三ヶ四年目

五九 此のいもだんく 積みどかしてまた其の上は三尺四寸に

三ヶ四年目から三段甘路台の心せしつかりとせかへ

いぢいか徳

六〇 其の上へ手鉾兼せて置たあらは是れよりたしかぢまもつをやら

いぢいか徳

二世のせう人

六一 ぢまもつを誰かにあたへる事あらは此の志始めた親に渡す

六二 天よりのおた(ニ世の親甘ろ口の)を世の親甘ろ口の(心)を誰かか知りた者あし

六三 月日よりたしか心に見定めてお水よりわたま(信者の真実を見て役割)おまむつのこと

六四 月日には之れを渡しておいたあらあとは親より心次(信者の真実を見て役割)の心

明治四十年四月八日(旧二月十六日) 押入三軒棟ありて一軒建ておいとまか此進む如何事有殊かと仰願

西に餘分(一)人あるわへ一人こちら(一)ウ、ー、ー、ー

本部におまめるとお水より信者の氣ト 中設せん

もうたてやひ日のたてわひ(一)日(一)のたてわひは 正月二十六日 二月二

天より二十六年目に之段が出てお水より甘ろ口がたてあひわ

誠の甘ろ口には

さあ(一)何にかの事お自由用とたてある自由用見せてある

明治三十四年七月二十三日 同日の社甘ろ口は明治三十四年三月廿九日

貞柱は今まだ若い(一)年(一)が(一)か(一)ぬ(一)から(一)神(一)の(一)し(一)こ(一)み(一)わ(一)う(一)す(一)け(一)水(一)ど(一)真(一)柱(一)が

二十四五とありたら(一)神(一)が(一)不(一)心(一)か(一)ど(一)ん(一)か(一)事(一)す(一)る(一)や(一)し(一)水(一)人(一)や(一)あ(一)ん(一)か(一)尊

信者のお水より(一)甘(一)ろ(一)口(一)の(一)大(一)木(一)が(一)あ(一)あ(一)と(一)お(一)水(一)の(一)程(一)に(一)真(一)柱(一)に(一)真(一)実

肉をま(一)て(一)お(一)水(一)真(一)が(一)大(一)々(一)あり(一)や(一)幹(一)が(一)忍(一)ら(一)く(一)あ(一)つ(一)たら(一)ど(一)ん(一)か(一)あ(一)ら(一)い(一)

枝が出るや(一)り(一)知(一)水(一)人(一)ぞ

お筆先七号 一 月日より三十八年(一)元(一)保(一)九(一)年(一)月(一)日(一)様(一)が(一)お(一)故(一)祖(一)に(一)由(一)教(一)祖(一)の(一)子(一)供(一)の(一)たま(一)い(一)

- 二 仰教祖下の子供と云ふは、先世の中の
月日より其のいんぬんがある故に、先世の中の
本部上級は甘みの世を教祖の子供と
かみたるは先味を知らず、世の世のに事
教祖の子供政子は甘みの世
此の処むと云ふは、世の世のの事から、世の世のは
本部上級へ世の親甘みの世の事
かみたるは、世の世のの直実をばや、世の世のと
本部上級は、世の世のの事
かみたるは、世の世のの事
月日よりは、世の世のの事
月日よりは、世の世のの事
人間の吾が子思ふも同じ事、世の世のの事
人間の吾が子思ふも同じ事、世の世のの事
- 三
- 四
- 五
- 六
- 七
- 八
- 九

- 一 此れ知らず比皆一列はめへ、天理に比皆うつかりと暮居し居るあり
- 二 此の世界ありかよるづを、天理の比皆うつかりと暮居し居るあり
- 三 此の話は、天理の比皆うつかりと暮居し居るあり
- 四 此の度、天理の比皆うつかりと暮居し居るあり
- 五 此の度、天理の比皆うつかりと暮居し居るあり
- 六 此の度、天理の比皆うつかりと暮居し居るあり
- 七 此の度、天理の比皆うつかりと暮居し居るあり

甘の台が道の中に出て来たり 甘の台建設の用木の
八 是れからは日々つきむ見定め あとのよふきのむよふばかりを

九 是れよりむむ長き からたん 月日が せして甘の口の元に取りよせて甘の台の
直に早くからけいといふ用木
致子春子秀司

一〇 日々に月日思惑に似かくある 同じ 二本 三本 用木

一一 此の木もめまつおまつは おはん やおり かある 木 も 月日 お は く

一二 此のあとは おに の 話 を する お ら は よ ふ き の も よ う は か り よ ふ か り

一三 用木 よ ふ き で む ち よ と の 事 は お い か り に よ お の 人 教 が ほ し い

一四 此の人 も つ つ ま も へ り ん よ ふ 未 成 つ い き 水 目 あ き よ ふ

一五 ころほどに思ひ月日の眞実を 比 留 の 心 は お ん と 思 ふ や

一六 どの様か と も き 話 を する た の も お た す け た い と の い ち じ よ ば か り い

一七 信者 い ち 此 の む ね の う ち より 眞 実 に 早 く わ か り た 事 は あ る あ り

一八 是れ わ り は 月 日 よ ふ 未 成 の 支 配 し て お に か あ つ の た す け す る や

一九 此の助け 早 く り や く を 見 せ た に 月 日 の 心 せ く ば か り や や

二〇 信者 早 く 甘 の 口 の う ち に 道 を よ き と め る

二一 此の 話 と こ の 事 や と お も い か よ は 白 か へ の う ち の 話 や

二二 信者 同 は 皆 心 を 密 し て さ し つ を 調 へ た り 談 の 道 甘 の 口 が 見 合 け ら れ る や

二三 甘の口 を 信者 同 に 更 あ さ す い せ し こ と

二四 月日 より 此 の せ き こ み が あ る 故 に 何 か に は な か が し い こ と

甘き台を見れば、そと道在体は甘き台一つにまよめる 一八二

三四 之れよりかはやく自由用見せられたる月日の心はとりよむむと

三五 神祖が天理の 神祖は甘き台はたすためかかたてあるから

三六 今また北のまか此の世の始まりと おいそあふともかたの事やう

三七 此の度の自由用自在とくしんせ今道 こんか事一はしるま

三八 月日より体内より北の道や自由用自在を以て自して見せる

三九 此の先はいつにかりん北の道より自由用自在を早く知らする

明道二十年三月二十日(即正月十六日)午後一時三十分

神祖此の世より二十六年目に神の恩恵の甘き台事情を始めると

およし正月二十六日 日足小未不 話してある ぐあ

甘き台二般事情を

事を始め

初まり

道の世用に出る来た甘き台事情は

世界

不思議也 夫々の道一寸つけか

明道二十年一月二十七日

甘き台事情は今日にさし出す今

さあ 今日までくらのやみの道 さあ 今日にさし出す今日

に始まる道やかい 前々に筆につけてある 説教として

始めかけは神が真柱に下りこんで始めさせたのやよう聞き

分けすかりかけた芽生と云ふはのみのとまりた様おもものやあふ

月日の社甘き台事情は本都を大同とたとへたる

一八三

之れが芽で此の芽は未代つづく大か人道のかりやで大か人

道の始めやで未代と云るためしはあい
お筆先四界

天の 今日の日はおにが珍らし始め出したましいの者高んぬん皆つりて来る

六一 たましいの者はいんぬんもおほくの人もあるかりにどこといへばあると思ふふ

六二 此の世を始めた神の事からはを界一列は皆吾が子あり

六三 一列の子供がわかい先小故に月日が色々な心つくしたるあり

六四 此の子供かにも教へてはやくと神の心のせきこみを是よ

六五 教祖の子供甘んじのだん／＼と子供のしゆせまわらぬる神の恩恵こよはかりあり

甘んじ

六六 子供さ甘んじ早く表へ出したおらかりを日本のちつにすするあり

甘んじ 月日恩恵を知らぬ信者を早く助けたりたいこよ

六七 眞実に子供甘んじの心しかとせよ神の心はせくばかりやで

甘んじ 甘んじは神の心をあけつりて信者のまを

六八 にくく神のせきこみ此のちやみ早く助ける様様してくれ

甘んじ 本都は月日の社とある人があいかり 念慮と出ている月日の社甘んじを本都にいれ

六九 うわおるはかみを思ひいづみいるこわみあいかりやかみのうけあ

甘んじ 五教百年祭から

七〇 さまま心と道がわたりあはる程に早くせきこみ大か人の道

甘んじ 昭和イササの理の本番請をして一人教あつめ百年祭から大か人の道

七一 此の道はいつの昔やと思ひいる早く出見まわう今のこと

甘んじ 理の本番請(甘んじ)に人教集め道の本番は信者の

七二 だん／＼と筆に知りしやある程に早く心にかたりとるよやう

甘んじ 甘んじは人教集め本番請をせんかち筆が身の上の者やわさしづ道心定めたり

七三 之れこいね早くさとりがついたおら身の上の者やわさしづ道心定めたり

七四 天理の 教祖が を教へて甘んば建設のため 一八六
つとめども 昨めておどり来たがら あよとの細首 つけてあしども

七五 だんく と甘んばし作りて道 知れず 早く本道 つける 模様を

七六 日々 に心 勇ん でせよ こゆ 早く本道 つけた事 あり

七七 眞実 に此の本道 成ついた かり 未 はたの む 陽を 氣づく ぬや

七八 道の 月日 代理 甘んば 道 の 中 が ま と ま り が
むら か た は な を む た す け を せ へ て い る 身 の 思 ひ 業 を し て え れ る よ り

七九 世界 中 神 のため には 比 自 吾 が 子 一 列 は 比 自 親 と 思 へ よ

八〇 世 田 中 説 教 とし 始 め け け 説 り て 爾 か す る 所 き に い く か す
信者 の 目 に 甘 ん ば 事 情 を 見 て い も と う 察 し け や 今 の 甘 ん ば が 出 て 来 た か を

八一 いか 程 に 見 へ たる 事 を む た と い え を 知 る 由 は わ か る 目 は お し

八二 だんく と い 事 は かり お い い も せ し 出 た か ら は 之 亦 が 誠 や

八三 一 列 に 神 に ま た し る 此 の 子 供 身 の 表 へ 出 る 模 様 せ よ

八四 眞実 に お も て 出 よ う と 思 ふ か ら い 心 定 め て 真 を 守 り ぬ よ

八五 此 の 子 供 眞 実 な よ う と 思 ふ の う ち 見 定 め つ け ば い か か 模 様 も

八六 日々 に 神 の 心 は せ や こ ゆ ど 子 供 の 心 か り お い の か

八七 子 供 を む ち よ と の 人 で お い か ら に お う く の む ね が さ ら に わ か ら ん

八八 人 間 の 心 と お い は あ が り し て 見 え たる 事 を ば かり ゆ ふ あり

八九 之 れ か ら は お い 事 は かり 説 り て お く 之 れ か ら 先 を た し か 見 て い よ

二七 どの様か事もだんくゆいかけ見あたる事はさらにゆわんや

二八 此の世を始めた神の真柱（月日）早（甘き日）つけたいかみののりぢよ（道の中におきめたい）

二九 目に見えん神の古事あま事をだんく聞（月日）いて思守ホしてみよ

一〇 本都の月日交配の道（人々の者は）本都は月日の心にかかはん心であるから本都員の◎
いまの道かみのまやとおもていふ心ちがひでかみのま、おひり
と本都員は道の

一一 かみたるは世界中をま、にするかみの殊念、水をしらんか

一二 三小まやはよろづ世界はかみのま、もう三小からはもんくかわるが（月日）思察と

一三 此の世を始めたかりにおむかも（天理の道と）説りイ聞かした事はあいの不

一四 上本都は道の（かまむと）かみたるは世界中を君がま、におもていふ力は心ちが、つ不

一五 高山（本都）におむつる木も谷底（用木）におむつる木も比白同じこと

一六 人間はみかく神のかしものや神の自由用（何事も）これを知らんか

一七 信者（心せしつかりと）あれつはみあ、五音が気をつけよ神かふんどま、ここ忍ゆくやら

一八 ちよと話神の心のせま、こみは、用木よせる模様がかりを（甘き台建設の本音請に入用の）

一九 本都甘き台事情、飯三飯か中に神の御用を勤めていふ者はたくさんあるけいど、
だんくとおお、たち木もあふけいど、とれが用木あふかし小ま、い（月日にかかう）

二〇 用木もちよとの事ではあ、程におほく用木（のようぼく）かほしい事から

二一 にあくによふゆくとては、いれするところがあしきと更に思ふふ

二二 用木（用木）おあし木もだんく、手（月日）小するもありそのま、こ、かま、きいもあるあり

二三 用木（用木）おあし木もだんく、手（月日）小するもありそのま、こ、かま、きいもあるあり

二三 甘の台事情 一八九〇
いかにあるの自由用自社の此のためし に始めて 教祖の道以外の外では
はかあるとこでさうにせんや

二四 今までもためしとてといた 三飯 甘の台事情や道のたまりやかり
もう此のたびはためしおさめや

二五 だん 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者
此の度は神が表へ出てるから 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者

二六 めん 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者
此の度は神が表へ出てるから 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者

二七 思案せよ痛と 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者
此の度は神が表へ出てるから 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者

二八 ちよとしたるめ 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者
此の度は神が表へ出てるから 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者

二九 今直は 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者
此の度は神が表へ出てるから 月日 甘の台事情に信者 月日 甘の台事情に信者

一 此の先は高山にて 本部から だん 本部 甘の台事情

二 いかんつに早く助ける 本部 甘の台事情

三 日々に世界の心 本部 甘の台事情

四 何にても助ける 本部 甘の台事情

五 今の道 本部 甘の台事情

六 百年祭から 本部 甘の台事情

七 高山の説教 本部 甘の台事情

一四九
三男

月日のさしづを甘らむらり 信者一両は
日々に神の話をたんとし、
神の思惑を
神の思惑を
神の思惑を

五九

今道はあにきと云ひても見えてあいかう此の度はせへつうが来た

六〇

之れからは陽氣づとゆに又かゝる何の事やらあよとに知小まい

六一

今まやむ知りて話して話せむ 説りてい小ども何の事やら

六二

之小まやは、お話を説りたとい日か来り人で見(いおいもや

六三

之れからはもうせへつうが来たるから言(は其のま、見(て来るもや

六四

志かとい聞けさんうくたごの暮る合にむ収の掃除を神がするぞや

六五

思安せよおんは澄んだる水やといどろをい介たりにこる事お星

本部の中を

六六

にがり水早く澄さん事には真の柱の入り様があい

六七

柱さい早く介たる事おらばまつた、しかとおさまりがつ

明治三十九年三月三十一日 夜九時
刻限

六八

道に流る、水を途中で理をあけて、志ま(ば、そだつ事せけ

六九

んいかかる者やわ此の話を聞いたら改良せ収ばからんで又一時さ

七〇

んゆむするやあろいかかる事とは思ふふよ

七一

さあ、此のはあしを聞いて何と思ひかゝる、草は(はあし、草はへの

七二

時のほあしはとんとわからあんだやわ、聞か、わた(あ、とんとし、わう